武蔵国分寺遺跡発掘調査概報

Ⅵ

市公共下水道南部地区15号工事に伴う調査

1982年3月

武蔵国分寺遺跡調査会
国分寺市教育委員会

序　　言

武蔵国分寺遺跡は、金堂、講堂等の主要建造物が置かれた僧・尼両寺の各寺域、付属施設等が置かれたと考えられる僧・尼両寺を含む寺地、その周辺に展開する竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などから成りたっていることが次第に明らかになりつつある。

これらの成果は寺域確認調査の他に、個人住宅建設に伴う小規模な調査や、下水管埋設工事に伴う道路下での地道な調査の積み重ねによるものである。

近年、市内の開発が進むにつれて、このような記録・保存措置を講ずるための事前発掘調査を行う機会が増え、住宅密集地域内や、往来がはげしい道路での調査であるために実施には多くの困難が伴うが、それにもかかわらず奮闘されている調査員諸氏には、改めて敬意を表するとともに、国分寺市教育委員会の文化財保護行政の指導には感謝いたすしだいである。

今回報告の南部地区15号工事に伴う発掘調査は、これまで比較的調査例の少なかった国分寺崖線直下（黒鍾谷）の様相の一端に触れるものとして意味があると考える。調査の具体的内容は各章に詳述してあるが、まだまだ不備な点も眼につくかと思います。御批判、御教示をいただければ幸いかと存じます。

最後に調査にあたって、終始御協力をいただいた国分寺市都市整備部下水道課の方々に感謝の意を表するものである。

調査会長　星　野　亮　勝

例　　言

1．本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡において、昭和48年以来実施されている調査の内、第37次、市公共下水道面整備南部地区15号工事に伴う事前調査の成果をまとめたものである。発掘調査は国分寺市都市整備部下水道課より委託金を受けて実施した。

2．本調査は、昭和52年10月27日より昭和53年４月17日まで実施した。行田裕美(昭和54年退出)が現場を担当した。

3．報告書作成は、武蔵国分寺遺跡調査会事務所で行った。

4．本書の執筆、編集は滝口宏・永峯光一・大川清・坂詰秀一の監修のもとに、調査員全員の検討、討議を経て上村昌男が行った。出土遺物、瓦の一覧表は有吉重蔵が行った。

5．出土遺物の実測・写真撮影・図版作成は、井田淑子・木村初江・小峰ミヨ子・山口啓子・若林雅子の協力を得た。

6．石器の実測は、小松真名(昭和55年恋ヶ窪遺跡調査会退出)が行った。

7．報告書作成の過程で、次の方々の御教示を賜った。厚く御礼申し上げます。

浅野晴樹・岡崎完樹・斉藤孝正・砂田佳弘・高林均・橋崎彰一・長谷部楽爾・服部敬史・坂野和信・守屋雅史

8．発掘調査、ならびに整理作業に参加協力いただいた方々は、下記の通りである。

発掘参加者

大久保敏明・工藤健司・小鳥居均・小林俊猛・清水隆博・高橋龍司・田中克宣・中村亨・長神明・成田昭・平野進・古見雅紀・真島謙三

整理参加者

上原政江・岡田恵理・川崎みつ子・神田礼子・鎌田育美・北畠博子・柳原優子・中村順子・長岡サカエ・馬上久美子・山口京子・草野夏美

凡　　例

本　　文

1．遺構は、各遺構毎にほぼ発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中においては、「ＳＤ73溝跡」・「ＳＳ13集石跡」の様に記述し、図版においては、「ＳＤ73」・「ＳＳ－13」の様に記す。

ＳＤ　溝跡・溝状遺構　　ＳＫ　土坑・瓦溜め

ＳＳ　集石　　Ｐ　小穴

2．調査地区の名称について「人孔」と記したが、下水道工事の立坑、マンホール部分の名称である。

図　　版

1．遺構

①スクリーントーンの指示は次のとおりである。

平面図		焼土		集石
断面図		盛土		黒褐色土
		漸移層		ローム層
		礫層		砂礫層

②平面図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南 26、276ｍ に後者がある。また僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、真北から7°08′03″、磁北から0°38′03″、それぞれ西偏する。

③断面表示の数字は水糸レベルで、海抜高を示す。

④縮尺は次の通り統一した。

土坑・小穴	1/50	集石跡	1/25
溝跡断面・平面図	1/50	遺構全体図	1/250
標準土層断面図	1/50	遺構配置図	1/2500

2．遺物

①土器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。

遺物		須恵器・土師器		灰釉陶器
		緑釉陶器		青磁

②墨書はベタであらわした。

③縮尺は、実測図においては実大・1/2.5・1/4、写真においては実大・1/2・1/3・1/4。何れかに統一してある。

④写真図版のうち出土遺物は、本文中の挿図番号と対照にした。例えば、「７－８」は、「第７図－８」のことを指す。

本 文 目 次

序　　言
例　　言
凡　　例
Ⅰ　調査に至る経過……1～2
Ⅱ　調査地区の概観……3
Ⅲ　層　　序……3
Ⅳ　調査工程と経過……4
Ⅴ　検出遺構……7
　No. 1．2．3．4人孔……7
　No. 5．6．7人孔……8
　No. 8．9人孔……9
Ⅵ　出土遺物……14～15
　土器一覧……16～25
　瓦 一 覧……26～31
　縄文土器、石器一覧……32～34
Ⅶ　小　　結……67～70

挿 図 目 次

第1図　調査地位置図……6
第2図　標準土層断面図……(6～7の間折込)
第3図　調査地区全体図……10
第4図　No.4人孔小穴・硬質面、No.7人孔SD73溝跡、No.9人孔土坑実測図……11
第5図　No.8人孔SD73溝跡実測図……12
第6図　No.7・8人孔集石実測図……13
第7図　4・6人孔表土出土遺物……35

目　　次

第８図　７人孔ＳＤ73出土遺物 …… 36
第９図　７人孔ＳＤ73出土遺物 …… 37
第10図　７人孔表土出土遺物 …… 38
第11図　７人孔出土遺物　表土・１～14、黒褐色土・15・16 …… 39
第12図　８人孔ＳＤ73Ａ期出土遺物 …… 40
第13図　８人孔ＳＤ73Ａ期出土遺物 …… 41
第14図　８人孔ＳＤ73Ｂ期出土遺物 …… 42
第15図　８人孔ＳＤ73Ｂ期出土遺物 …… 43
第16図　８人孔出土遺物　ＳＤ73Ｂ期・１～７、表土・８～12 …… 44
第17図　１・２・３人孔表土出土遺物 …… 45
第18図　４人孔表土出土遺物 …… 46
第19図　５人孔出土遺物　表土・２・６、黒褐色土・１・３・４、暗茶褐色土・５ …… 47
第20図　５・６人孔出土遺物　表土・１・２・３、暗茶褐色土・４ …… 48
第21図　６人孔出土遺物　表土・２・３、暗茶褐色土・１ …… 49
第22図　６人孔表土出土遺物 …… 50
第23図　６人孔表土出土遺物 …… 51
第24図　６人孔表土出土遺物 …… 52
第25図　６人孔表土出土遺物 …… 53
第26図　６人孔表土出土遺物 …… 54
第27図　７人孔ＳＤ73出土遺物 …… 55
第28図　７人孔ＳＤ73出土遺物 …… 56
第29図　７人孔表土出土遺物 …… 57
第30図　７・８人孔出土遺物　表土・１・２・３・４、ＳＤ73Ａ期・５・６ …… 58
第31図　８人孔ＳＤ73Ａ期出土遺物 …… 59
第32図　８人孔ＳＤ73Ａ期出土遺物 …… 60
第33図　８人孔ＳＤ73Ｂ期出土遺物 …… 61
第34図　８・９人孔出土遺物　表土・１・２・３、ＳＫ286・４ …… 62
第35図　５・８人孔出土遺物 …… 63
第36図　８人孔出土遺物 …… 64
第37図　５・７・８人孔出土遺物　ＳＳ－21・１、ＳＳ－13・７ …… 65
第38図　７・８人孔出土遺物 …… 66

図 版 目 次

第１図版　調査地区……１．調査地点遠景（南より）
２．調査地点遠景（東より）
３．調査風景
第２図版　１・２人孔……１．１人孔調査区全景（北より）
２．２人孔調査区全景（東より）
３．２人孔調査区西壁断面
第３図版　３・４人孔……１．３人孔調査区北壁断面
２．４人孔調査区全景（西より）
３．４人孔調査区北壁断面
第４図版　５・６人孔……１．５人孔調査区全景（東より）
２．６人孔調査区全景（東より）
３．６人孔調査区南壁断面
第５図版　７人孔……１．７人孔調査区全景（東より）
２．７人孔調査区西壁断面
３．７人孔SD73溝跡全景（東より）
第６図版　７人孔……１．７人孔堆土堆積状態（東より）
２．７人孔SS21集石出土状態（南より）
３．７人孔SS21集石出土状態（西より）
第７図版　８人孔……１．８人孔SD73A期溝跡全景（東より）
２．８人孔SD73B期溝跡全景（東より）
３．８人孔SD73A・B期溝跡断面
第８図版　８・９人孔……１．８人孔SS13集石出土状態（西南より）
２．９人孔SK286土坑全景（東より）
３．９人孔SK286土坑断面
第９図版　４・６・７人孔出土遺物
第10図版　７人孔出土遺物
第11図版　７人孔出土遺物
第12図版　７・８人孔出土遺物
第13図版　８人孔出土遺物
第14図版　８人孔出土遺物
第15図版　１・２人孔出土遺物
第16図版　３・４人孔出土遺物
第17図版　４人孔出土遺物
第18図版　５人孔出土遺物

目　　次

第19図版　5人孔出土遺物
第20図版　6人孔出土遺物
第21図版　6人孔出土遺物
第22図版　6人孔出土遺物
第23図版　6人孔出土遺物
第24図版　6人孔出土遺物
第25図版　6人孔出土遺物
第26図版　6・7人孔出土遺物
第27図版　7人孔出土遺物
第28図版　7人孔出土遺物
第29図版　7人孔出土遺物
第30図版　7人孔出土遺物
第31図版　7・8人孔出土遺物
第32図版　8人孔出土遺物
第33図版　8人孔出土遺物
第34図版　8人孔出土遺物
第35図版　8人孔出土遺物
第36図版　8人孔出土遺物
第37図版　8・9人孔出土遺物
第38図版　縄文土器
第39図版　縄文土器
第40図版　石器
第41図版　石器・鉄器

Ⅰ　調査に至る経過

昭和52年３月11日、国分寺市都市整備部下水道課より南部地区15号工事に伴う、立坑推進部分の埋蔵文化財の調査について、市教委社会教育課に届出があった。

この地域は、昭和51年度28次調査でＳＤ23溝跡（僧寺々域西辺）　ＳＢ39掘立柱建物跡、建物跡に伴う瓦積み基壇状遺構、ＳＫ163土坑が検出されており、良好な状態で遺構が保存されていることが判明している。また立坑部分の一部は国の指定地となっていることにより、文化庁、市下水道課、社会教育課で協議をおこなった結果、つぎの方法で本調査を実施することに協議がととのった。

①調査は、下水道推進人孔（立坑）工事区域No.１～No.９人孔の９ヵ所を対象とする。

②工事期間の短縮をはかるため、試掘を実施しないで本調査を行う。

③出土遺物が多いことが予想されるため、掘削は地表面より人力で行う。

④調査区内で重要な遺構が検出される場合は、再度協議し立坑の位置を変更する。

⑤奈良・平安時代遺構の検出後、縄文時代の遺構の検出を行う。

武蔵国分寺遺跡調査会組織　　（57年３月現在）

会　長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会専門委員
〃	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
理　事	永峯光一	東京都文化財保護審議会専門委員
〃	大川　清	国士館大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
〃	本多良雄	国分寺市長
〃	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
〃	山本　耿	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
〃	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議々長
〃	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員
〃	松井新一	〃
〃	吉田　格	〃
〃	藤間恭助	〃

監　事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
〃	斉藤龍司	東京都教育庁社会教育部文化課・埋蔵文化財企画調査担当主査
事務局長	大阪喜七	国分寺市教育委員会次長
事務局長補佐	江崎昭彦	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
〃	安田　暉	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	小林文治	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
〃	鈴木　晃	国分寺市教育委員会文化財庶務係

調　査　団

団　長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会専門委員
副団長	永峯光一	東京都文化財保護審議会専門委員
〃	大川　清	国士館大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
調査員	西脇俊郎	東京都教育庁社会教育部文化課学芸員
〃	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財課保護係員
〃	福田信夫	〃
〃	上村昌男	〃
〃	平田貴正	
〃	高橋和恵	
〃	樋口喜重子	

II 調査地区の概観

武蔵国分寺跡は、国分寺市西元町１～４丁目を中心とする付近一帯に所在し、僧寺金堂跡を中心にして、東西２km、南北１kmの範囲に遺構の分布が認められる。

遺構北方部分には、国分寺崖線（通称ハケ）と称される比高12mほどの急崖が東西方向に蛇行しながら走り、上面の武蔵野段丘面、下面の立川段丘を境としている。従って、遺跡は両段丘にまたがって立地する特徴をもっている。

この崖線直下には、現在でも各所に豊富な湧水が認められ野川の水源の一つとなっているが、黒鐘公園付近に発源する湧水が流れる地域は、立川段丘と武蔵野段丘との間にあって、比高差２m前後の浅い谷を形成している。この谷は黒鐘谷と呼ばれている。（鈴木隆介他　1974）

今回実施した第37次調査は、黒鐘谷に沿って僧寺々域内北側部分、No.１、２、３、４人孔調査区と僧寺を画する溝（SD23）西辺の西側部分、No.５、６、７、８人孔調査区、一部国分寺崖線の中位、No.９人孔調査区に当る。（第１図）

付近一帯は、第13次調査、市立第四中学校排水工事に伴なう立会い調査の際、須恵器、土師器、瓦等の遺物が多量に出土した地域である。また、第28次調査においては多数の遺構が検出された(1)ことにより国分寺関連の遺構が予想されていたところである。

註１　SD23溝跡、SB39掘立柱建物跡、建物跡に伴う瓦積み基壇状遺構、SK163土坑等が検出される。「文化財の保護」12号

III 層　　序

盛　土　暗褐色（表土）、黒褐色土、ロームブロック等を含む撹乱土層、No.９人孔にて2.0～2.5mの層厚をもつ。おそらく国分寺崖線を宅地造成の際に掘削されてできたものと考えられている。

I　層　表土、地表面近くは、畑の耕作により撹乱をうけている。層厚は人孔によって異なるが、約1.0～2.0m前後の厚さをもつ。奈良、平安時代の遺物を多量に出土する。

II　層　黒褐色土層、僧寺々域内、No.２人孔から４人孔までは単一な土層であるが、僧寺々域外、No.５人孔から８人孔においては、炭化物、粘土粒、小礫、砂粒等の混入物により３区分（II_1、II_2、II_3）できる。今回の調査では、奈良・平安時代の遺構は黒褐色土上面ないし中位で検出された。層厚は人孔により異なるが、約0.5～1.0m前後である。

III_a 層　暗茶褐色土層、色調、粘性、混入物等により分層（III_{a1}、III_{a2}）が可能である。暗茶褐色土層上面ないし中位から、縄文時代の遺構が検出された。

Ⅲb層　茶褐色土層、立川段丘面におけるローム層への漸移層に対比されるものと考えられる。

ⅣTcL層　黄褐色土層、立川ローム層にあたる。

ⅣML層　黄褐色土層、武蔵野ローム層にあたる。

TG層　立川礫層にあたる。

MG層　武蔵野礫層にあたる。　（第２図）

Ⅳ 調査工程と経過

各人孔の発掘調査にあたり、次の工程で作業を実施した。

①調査区の設定、市下水道工事課より、各人孔の位置を現地で設定してもらう。

②測量、武蔵国分寺中軸線、トラバーポイントを現地に移動する。

③表土掘削、ベルトコンベアーを使用し、人力で掘削作業を行なう。排土はダンプにより調査地区外に搬出する。

④奈良・平安時代遺構の検出と調査。

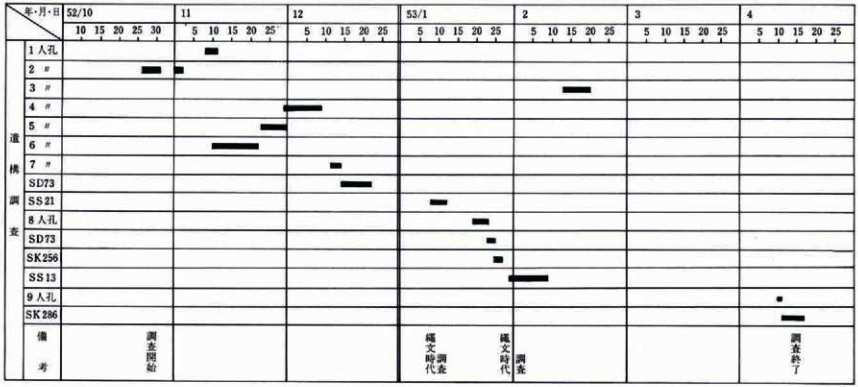
⑤縄文時代遺構の検出面までの掘削、表土掘削の方法と同じ。

⑥縄文時代遺構の検出と調査。

⑦立川礫層まで調査区の一部分を掘削、調査区の土層図を作成するための作業。

昭和52年10月27日から№２人孔より本調査を開始した。以下、下水道推進工事の工程進行にあわせて、№１、６、５、４、７、８、３、９人孔の順序で調査を実施し、昭和52年４月17日で調査を終了した。調査総面積は約181.89㎡である。

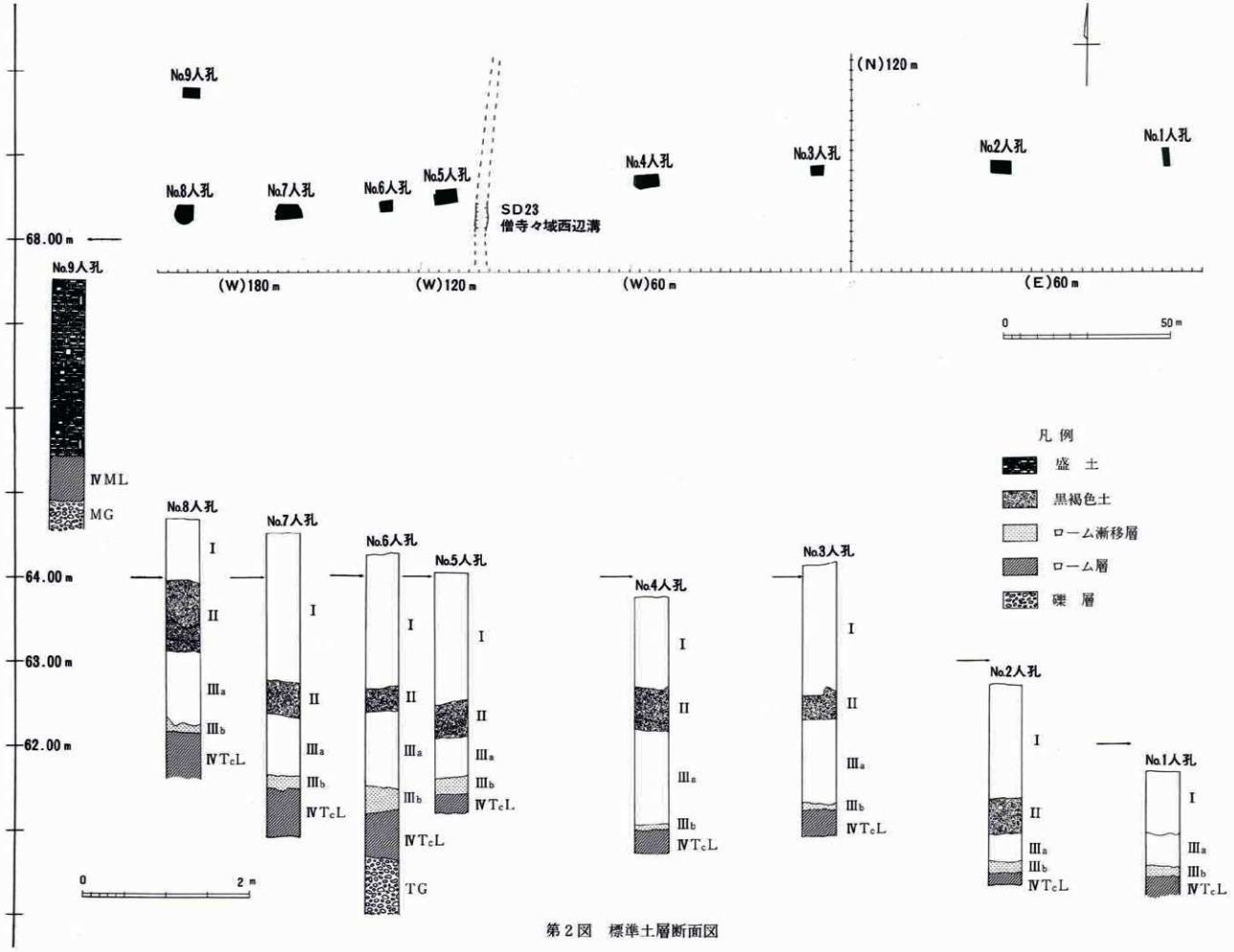
各人孔ともに表土層が厚く粘質であること、出土遺物が表土層より多量に包含されていること、黒鐘谷の谷底低地で土の堆積が複雑であることにより、遺構確認面までの掘削作業、遺構の検出作業に時間を費してしまった。また、ベルトコンベアー等の機械の使用が不慣れのために、故障し調査が中断したこともあり、遺構数にくらべて調査期間が長くなってしまった。（第１表）


年・月・日
52/10
11
12
53/1
2
3
4
10 15 20 25 30
5 10 15 20 25
5 10 15 20 25
5 10 15 20 25
5 10 15 20 25
5 10 15 20 25
5 10 15 20 25
遺構調査
1 人孔
2 〃
3 〃
4 〃
5 〃
6 〃
7 〃
SD73
SS21
8 人孔
SD73
SK256
SS13
9 人孔
SK286
備考
調査開始
縄文時代
調査
縄文時代
調査
調査終了

第Ⅰ表　調査工程表

No.9トレンチ
No.8トレンチ
No.6トレンチ
No.5トレンチ
No.4トレンチ
No.2トレンチ
No.1トレンチ
No.7トレンチ
調査地
講堂
金堂
中門
国分僧寺
国分尼寺
国分寺市
東元町二丁目
西元町一丁目
西元町三丁目
西元町四丁目
0
100
200
300m

第1図　調査地位置図


No.9人孔
No.8人孔
No.7人孔
No.6人孔
No.5人孔
No.4人孔
No.3人孔
No.2人孔
No.1人孔
SD23
僧寺々域西辺溝
(N)120 m
(W)180 m
(W)120 m
(W)60 m
(E)60 m
0
50 m
68.00 m
64.00 m
63.00 m
62.00 m
Ⅳ ML
MG
I
II
IIIa
IIIb
Ⅳ TcL
TG
0
2 m
凡 例
盛 土
黒褐色土
ローム漸移層
ローム層
礫 層

第２図　標準土層断面図

V 検 出 遺 構

本調査で検出された遺構は、武蔵国分僧寺に関係を有する奈良・平安時代の遺構と、多喜窪遺跡に関係すると思われる縄文時代の遺構である。

各地区人孔の検出遺構を示しておく。（第３図）

No.１、２、３、５、６人孔、遺構は検出されない。

No.４人孔、硬質面、小穴３個

No.７人孔、ＳＤ73溝跡、ＳＳ21集石跡

No.８人孔、ＳＤ73溝跡、Ａ期、Ｂ期、ＳＳ13集石跡

No.９人孔、ＳＫ286土坑、小穴２個

No.１人孔　（第３図、第１図版）

僧寺中軸線から東へ94ｍ、北へ94ｍの位置にあり、今回の調査区のいちばん東にあたる。Ⅲa層暗茶褐色土、Ⅲb層漸移層面において遺構の検出作業をおこなったが、遺構は確認されなかった。

No.２人孔　（第３図、第２図版）

僧寺中軸線から東へ45ｍ、北へ90ｍの位置にある。Ⅱ層黒褐色土上面と、Ⅲb層漸移層にて遺構の検出をおこなったが確認されず。

No.３人孔　（第３図、第３図版）

僧寺中軸線から東へ10ｍ、北へ90ｍの位置にあたる。遺構の確認をⅡ層黒褐色土上面と、Ⅲb層漸移層上面においておこなったが検出されず。

No.４人孔　（第４図、第３図版）

僧寺中軸線から西へ60ｍ、北へ87ｍの位置にあたる。Ⅱ層黒褐色土中において、硬質面、Ⅲa層暗茶褐色土上面において、小穴３個が検出される。

硬質面

調査区の南東部分に位置し、全体の広がりについては未発掘部分に入っており把握できないが、調査区内では東西３ｍ、南北５ｍ、層厚は10～20cmを測る。僧寺々域ＳＤ23溝跡の上面にて検出される硬質面と同質のものである。

硬質面中よりの遺物は検出されなかった。

小穴

Ｐ－１は円形を呈し、長径58cm、短径50cm、深さ40cmを測る。Ｐ－２は楕円形を呈し、長径50cm、短径40cm、深さ25cmを測る。Ｐ－３は隅丸円形を呈し、長径55cm、短径38cm、深さ36cm

を測る。小穴の堆積土は、Ⅱ層黒褐色土である。

小穴中よりの遺物は検出されなかった。

No.5 人孔　（第3図、第4図版）

僧寺中軸線より西へ140m、北へ82mの位置にあたる。Ⅱ層黒褐色土上面と、Ⅲa層暗茶褐色土上面において遺構の検出をおこなったが確認されなかった。

調査区西南断面において一部SD73溝跡のフク土と思われる砂礫層の痕跡が確認される。

No.6 人孔　（第3図、第4図版）

僧寺中軸線より西へ168m、北へ78mの位置にあたる。Ⅱ層黒褐色土上面と、Ⅲa層暗茶褐色土上面において遺構の検出をおこなったが確認されなかった。

調査区西壁断面においてSD73溝跡のフク土と思われる砂質層の痕跡が認められる。

No.7 人孔　（第4・6図、第5・6図版）

僧寺中軸線より西へ168m、北へ78mの位置にあたる。Ⅱ層黒褐色土上面において、SD73溝跡、Ⅲa層暗茶褐色土上面において、SS21縄文時代集石跡が検出される。

SD73溝跡

SD73溝跡は調査区を東西に走り、僧寺中軸線東西方向より約13度南偏する。北壁または底面は、四中排水管の掘削の際にこわされている。現存する溝の上端幅は約146cm、底面幅は約92cm、確認面からの深さ西側で約30cm、東側で約40cmで、断面形は逆三角形を呈する。溝の堆積土を観察すると、やや水分を含む砂粒と小礫が多量に混入している土層である。

出土遺物は、フク土中に瓦類、土師器、須恵器等が多量に含まれている。遺物等の出土状態より溝は二時期にわたり存在した可能性も考えられるが、旧排水管等の掘削で大半がこわされているために遺構を区分することができず、溝の一括遺物として扱った。

また、SD73溝跡北側部分において焼土の堆積が2箇所認められた。範囲は直径30cmのほぼ円形のもの、調査区の北西コーナーにかかっており全体の広がりは把握できないが、東西約220cm、南北約60cmのものである。焼土中より遺物は出土していない。

SS21集石跡

集石跡の規模と形態、北側部分は未発掘部に入っており全体の広がりは不明であるが、調査区内では東西約100cm、南北約150cm、厚さ10cmを測る。礫の大半は破砕礫であり、焼礫等は含まれていない。集石底面の状況は、土坑等の掘込みは検出されず、ただ単に平面的な広がりを示すものである。

出土遺物は、石槍（第37図、1）が1点出土している。

No.8 人孔　（第5・6図、第7・8図版）

僧寺中軸線より西へ198m、北へ78mの位置にあたる。Ⅱ層黒褐色土上面において、SD73A

期溝跡、Ⅱ層黒褐色土中において、SD73B期溝跡、SK256土坑、Ⅲa層暗茶褐色土中より、SS13縄文時代集石跡が検出される。

SD73A期溝跡

溝は調査区を東西に走り、僧寺中軸線東西方向より約7度北偏し、調査区中心部で約11度南偏する。その規模は上端幅130cm、底面幅50cm、確認面からの深さ西側で20cm、東側で30cmで、断面形は丸味をもった逆台形を呈する。溝の堆積土は、砂粒と礫が多量に含まれる砂礫層である。

出土遺物は、フク土中に瓦類、土師器、須恵器、灰釉陶器が多量に検出される。

SD73B期溝跡

溝はA期と同じく調査区を東西に走り、僧寺中軸線より約3度北偏する。その規模は上端幅150cm、底面幅60cm、確認面からの深さ調査区西側で20cm、東側で35cmである。断面形は丸味をもった逆台形を呈する。溝の堆積土は、砂粒と小礫が多量に含まれた土層である。

出土遺物は、瓦類、土師器、須恵器が多量に含まれる。

SK256土坑

B期溝跡南側部分において検出される。平面形は隅丸長方形で、長径136cm、短径116cm、確認面からの深さ20cmである。

遺物は検出されなかった。

SS13集石跡

集石跡の規模と形態、全体の広がりは調査区の北東コーナーにかかっており把握はできない。調査区内では東西約3m、南北約3.3m、厚さ0.35mを測る。礫は自然石が大半であるが、一部火熱された礫が含まれている。集石底面の状況は、SS21集石跡と同じく、底面に土坑状の掘込みは検出されず、平面的な広がりを示すものである。

出土遺物は、打製石斧（第37図、7）を1点出土している。

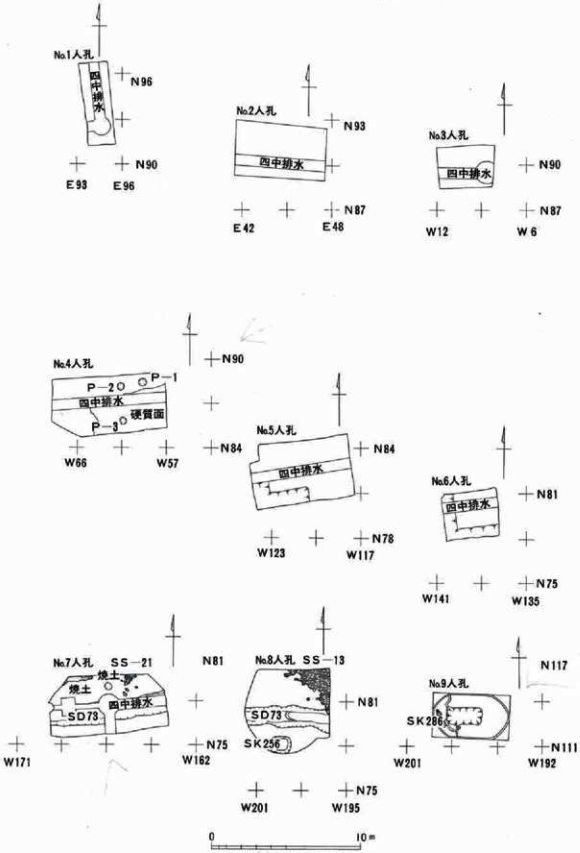
No.9人孔　（第4図、第8図版）

僧寺中軸線より西へ197m、北へ112mの位置にあたる。Ⅳ$_{ML}$層ローム上面において、SK286土坑が検出された。

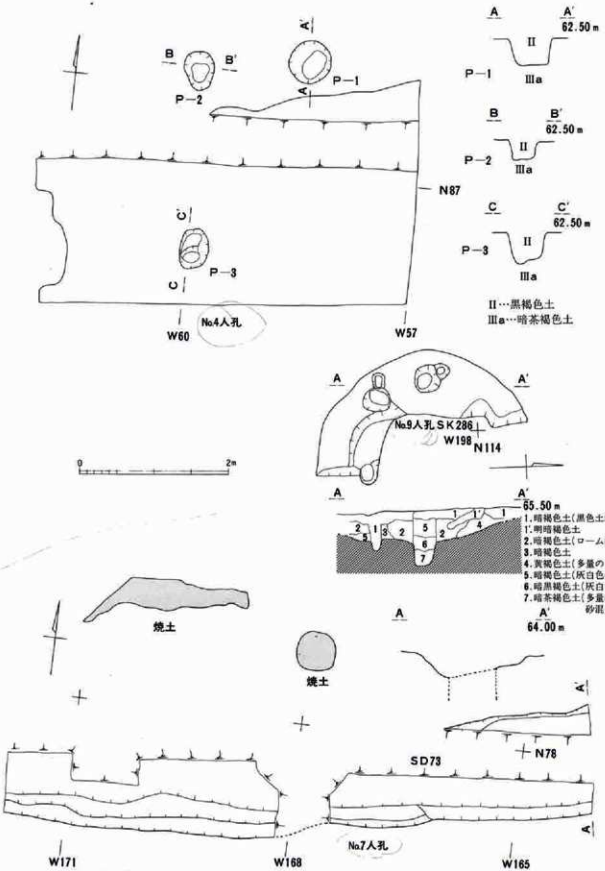
SK286土坑

土坑の規模は、東側については攪乱により破壊されている。西側については調査区外にのびているために広がりは把握できない。堆積土は、暗褐色土に砂粒が混った土層が主体で、小穴2個がフク土中より検出される。

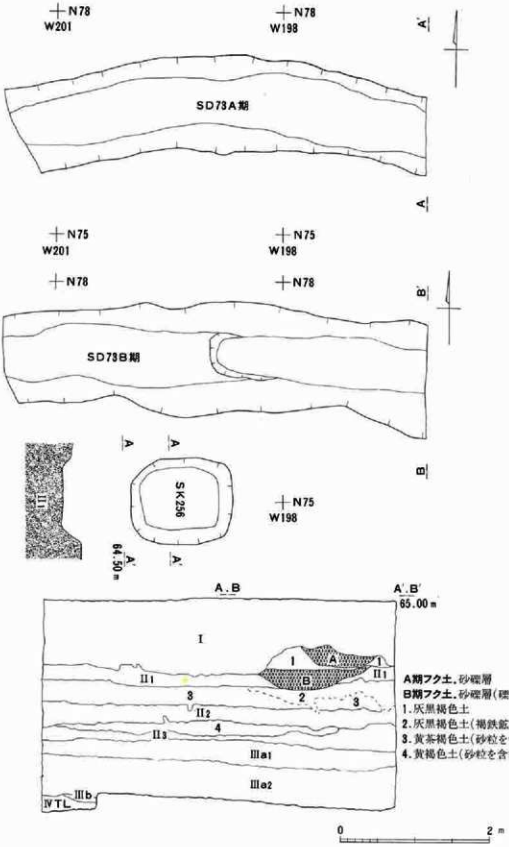
遺物は、瓦片が小量出土している。


No.1人孔
四中排水
N96
N90
E93
E96
No.2人孔
N93
四中排水
N87
E42
E48
No.3人孔
四中排水
N90
N87
W12
W6
No.4人孔
P−2
P−1
四中排水
P−3
硬質面
N90
N84
W66
W57
No.5人孔
四中排水
N84
N78
W123
W117
No.6人孔
四中排水
N81
N75
W141
W135
No.7人孔
SS−21
焼土
焼土
四中排水
SD73
N81
N75
W171
W162
No.8人孔
SS−13
SD73
SK256
N81
N75
W201
W195
No.9人孔
SK286
N117
N111
W201
W192
0
10m

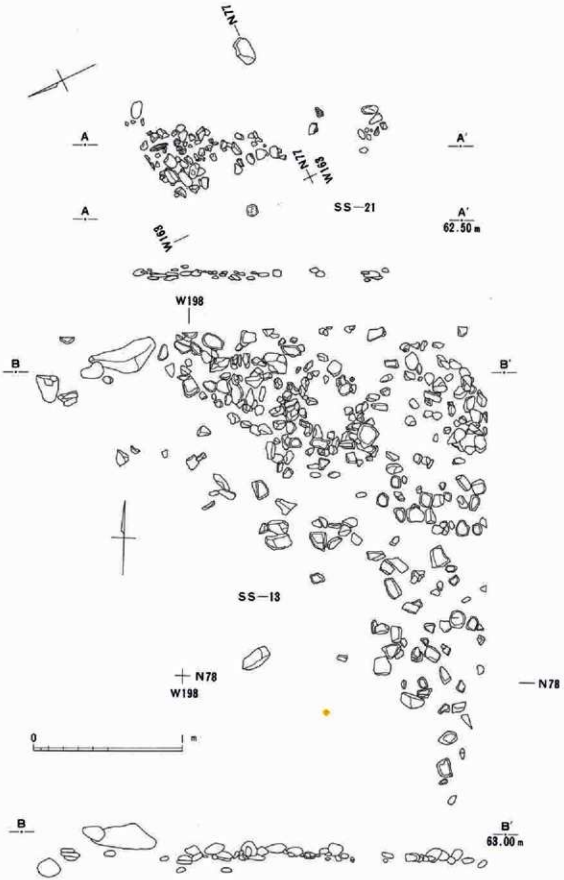
第3図 調査地区全体図



第４図　No.４人孔小穴　・硬質面、７人孔ＳＤ73溝跡、９人孔土坑実測図



第5図 No.8人孔SD73溝跡実測図



第6図 No.7・8人孔集石実測図

Ⅵ 出 土 遺 物

今回の調査により出土した遺物には、土器・瓦・石製品・土製品・金属製品などがある。総量はコンテナ70箱ほどであり、その多くは表土層・SD73溝跡から出土している。

遺物の記述は全て一覧表によったが、表記の方法について以下補足説明しておきたい。

(1) 各遺物共通

イ．法量（寸法）数値　明朝体は完数値・復原数値・ゴシック体は残存数値を表わし、単位はcmである。

(2) 土器

イ．法量　上より順に口径・器高・底径を表わす。

ロ．種別　土：土師器、須：須恵器、灰：灰釉陶器、緑：緑釉陶器

ただし須恵器については、還元焔焼成のものを須A、酸化焔焼成のものを須Bとした。

(3) 瓦

鐙瓦

イ．内区文様および弁数　T：単弁、O：特異文

弁数は明朝体は完弁数・復原弁数、ゴシック体は残存数を表わす。

ロ．外区文様　以下の組合せによる。ただし内外縁の区別のないものについては外縁欄に記入した。

形態　A　内外縁の区別のあるもの　　内・外縁の文様　a　素文

B　内外縁の区別のないもの　　b　珠文

c　その他

宇瓦

イ．内区文様　G：重弧文、KK：均正唐草文、HK：偏行唐草文、H：ヘラ書き文、T：竹管文、K：格子文(ヘラ書きは除く)、J：縄文、O：その他

ロ．上・下外区、脇区文様　a　素文、b　珠文、c　長円珠文、d　圏線文、e　鋸歯文、f　凸線文、g　その他

ハ．顎の形態　以下の組合せにより記入

E　直線顎

a　凸面を整形するもの

b　瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c　不整形のもの。

F　段顎

F_1　瓦当凸面と凹面が平行するもの

F_2　F_1以外のもの

a　瓦当凸面および瓦当裏面を整形するもの

b　瓦当凸面のみ整形するもの

c　瓦当裏面のみ整形するもの

d　不整形のもの

G　曲線顎

G_1　瓦当凸面が内彎しながら女瓦凸面に移行するもの

G_2　瓦当凸面がやや直線的に内傾しながら女瓦凸面に移行するもの

a　瓦当凸面を整形するもの

b　瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c　不整形のもの

男瓦・女瓦

イ．布目本数　3㎝四方内での側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす。

ロ．縄叩き目本数　3㎝四方内での縄数を表わす。

ハ．縄の撚り　L　縄圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの

R　縄圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの

ニ．粘土板合せ目　佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」での分類S・Zによる。

ホ．布合せ目　粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる。

土 器 一 覧

4人孔

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
7 — 1 9図版	須A— 風字硯	表 土		硯面の徒部の間きが大きい支脚は三角形をしている。	硯面部分ナデ。 側面ヘラ削り。	前部欠損有。 海綿骨針を含む。
7 — 2	須A—壺	表 土	—— 3.5 12.7	底部と体部のきかいに沈線あり。	外面は底部にかけ、縦にヘラ磨き、粘土の輪積み痕あり。	破片
7 — 3	灰 — 皿	表 土	—— 1.8 8.4	高台部分、台形を呈す。	底部、体部の内外面ともロクロによるナデ。高台部分ロクロによるナデ。施釉は流しかけ。	破片

6人孔

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
7 — 4 9図版	須A—坏	表 土	13.3 3.7 5.0	体部はやや内彎し、口唇部は肥厚する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	
7 — 5	須A—坏	表 土	14.1 3.6 5.0	底部より体部にかけて内彎し口縁部はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	底残存。
7 — 6 9図版	須B— 小皿	表 土	9.9 2.4 5.9	口縁部外反する。口縁部内面に粘土の継ぎ目あり。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	完残存。 カワラケ。
7 — 7 9図版	須A— 小皿	表 土	9.1 1.8 5.5	体部はやや内彎し、口縁部はやや強く外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	完残存。 カワラケ
7 — 8 9図版	緑— 手付瓶	表 土	—— 12.5 ——		ロクロ整形、内外面とも施釉。	内面にススが付着。釉は黄緑色。
7 — 9 9図版	土—脚部	表 土	—— —— 2.4		脚面に、指頭痕。	

7人孔

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
8 — 1 9図版	土 — 坏	S D 73 フ ク 土	11.8 3.75 5.3	底部から口縁部にかけて、やや直線気味に開く。	底部から体部下半分手持ヘラ削り。体部中央指頭痕顕著。体部上半分から、口縁部にかけ横ナデ。	底部残存。
8 — 2 9図版	須B—坏	S D 73 フ ク 土	12.0 4.0 6.8	底部から口縁部にかけて直線気味に開く。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	完残存。

7人礼

土 器 一 覧

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
8 － 3 9図版	須A－坏	S D 73 フ ク 土	11.8 4.5 5.5	底部から体部にかけて内彎し口縁部は外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	⅔残存。
8 － 4 10図版	須A－坏	S D 73 フ ク 土	11.8 3.4 5.7	底部から体部にかけて直線気味に開く。	底部回転糸切り。口縁に粘土紐の巻き上げ痕あり。	完形。
8 － 5	須A－坏	S D 73 フ ク 土	12.7 3.4 6.3	底部から体部にかけて内彎し口縁部にかけ外反する。	底部回転糸切り。体部に粘土紐の巻き上げ痕あり。	底部残存。口縁わずか残存。
8 － 6	須A－坏	S D 73 フ ク 土	12.5 3.95 7.0	底部から体部にかけて内彎し口縁部やや外反する。	底部回転糸切り。口縁部に粘土紐の巻き上げ痕あり。	½残存。
8 － 7	須A－坏	S D 73 フ ク 土	12.0 3.8 7.0	底部から口縁部にかけて直線気味に開く。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	½残存。
8 － 8 10図版	須A－坏	S D 73 フ ク 土	11.8 3.6 6.6	底部から体部にかけて内彎し口縁部はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。口縁部に粘土紐の巻き上げ痕あり。	½残存。
8 － 9	須A－坏	S D 73 フ ク 土	12.0 3.5 5.8	底部から口縁部にかけて直線気味。口縁はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	⅓残存。
8 － 10	須A－坏	S D 73 フ ク 土	11.6 3.8 5.9	底部から体部にかけて内彎し口縁部はやや直立気味。	ロクロ整形、底部回転糸切り。粘土紐の巻き上げ痕あり。	½残存。海綿骨針を含む。
8 － 11 10図版	須A－坏	S D 73 フ ク 土	—— 2.6 5.9		ロクロ整形、底部回転糸切り。	底部に「土」のヘラ書き文字あり。
8 － 12	須A－皿	S D 73 フ ク 土	15.8 1.65 7.1	口縁部水平に開く。	ロクロ整形。	破片
8 － 13 10図版	須A－皿 高台付	S D 73 フ ク 土	14.3 3.4 5.9	底部から体部にかけて内彎し口縁部は強く外反する。	ロクロ整形、底部糸切り後高台部分付着し横ナデ。体部に粘土紐の巻き上げ痕あり。	⅔残存。
8 － 14	須A－埦	S D 73 フ ク 土	15.0 6.2 7.2	底部から体部にかけて内彎し口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。	½残存。
9 － 1 10図版	須B－埦	S D 73 フ ク 土	15.0 5.9 8.4	底部から体部にかけて直線気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り後外縁部へラ削り。	½残存。内面タール付着。
9 － 2 10図版	須A－鉢 高台付	S D 73 フ ク 土	18.7 9.95 9.3	底部から体部にかけて内彎し口縁部やや外反する。高台部分「ハ」の字状に開く。	ロクロ整形。高台部分貼付け後、ロクロによるナデ。	½残存。
9 － 3	灰－ 短頸壺	S D 73 フ ク 土	8.4 1.9	口頸部短かく、やや内傾し肩部は撫で肩。	ロクロ整形、口縁肩部ナデ。	口縁破片。釉は鉄灰色に黒色の斑点。

土器一覧

7人孔

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
9 － 4	灰－ 長頸瓶	S D 73 ク ク 土	14.0 1.0	口頸部はラッパ状に開く。	施釉は刷毛塗り。	釉は緑褐色。 口縁の小破片。
9 － 5	灰－ 長頸瓶	S D 73 ク ク 土	—— 7.8		ロクロ整形、内外面とも丁寧なナデ。頸部・胴部の二段継ぎ。施釉は刷毛塗り。	頸部残存。釉は薄灰緑色。
9 － 6	須B－坏	S D 73 ク ク 土	19.1 8.0	体部から口縁にかけて内弯し口縁部でやや外反する。	体部・口縁部の内外面ともロクロによるナデ。	底部なし。体部写残存。
9 － 7	須A－坏	S D 73 ク ク 土	17.6 7.2	体部はやや内弯しながら立ち上り、口縁は直線的である。	体部・口縁部の内外面ともロクロによるナデ。高台の付いた可能性あり。	底部なし。体部写残存。
9 － 8	須A－坏	S D 73 ク ク 土	15.4 5.9	体部は内弯気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。	体部内外面ロクロによるナデ後、体部外面下半分ヘラ削り。	底部なし。写残存。
9 － 9 10図版	灰－ 長頸壺	S D 73 ク ク 土	6.1 19.6 6.0	頸部から口縁にかけて直立気味に立ち上り、口縁で外反する。	頸部・肩部・胴部ともロクロによるナデ。底部回転糸切り。	完形。
10 － 1 11図版	土 － 坏	表 土	11.8 3.65 6.4	底部から体部にかけて内弯し口縁部はやや外反する。	底部は手持ヘラ削り。体部外面に指頭痕あり。	内面スス付着。赤色スコリア状物質を含む。
10 － 2 11図版	須B－坏 高台付	表 土	—— 2.75 8.3	高台部分外反する。	高台部分貼付け後ナデ。底部内面墨書文字あり。	赤色スコリア状物質を含む。
10 － 3	土 － 坏	表 土	12.2 3.3 6.0	底部から体部にかけて内弯し口縁部はやや外反する。	底部から体部下端にかけてヘラ削り。体部中央指頭痕あり。	赤色スコリア状物質を含む。
10 － 4 11図版	須A－坏	表 土	12.0 3.4 6.4	底部から口縁部にかけてやや直線気味に開く。	ロクロによる糸切り後、中心部分糸切り痕残してヘラ削り。	完形。
10 － 5 11図版	須A－坏	表 土	12.1 3.7 6.6	底部から体部にかけて内弯し口縁部はやや直立気味に開く。	ロクロによる糸切り後、中心部分糸切り痕残してヘラ削り。	海綿骨針を含む。
10 － 6	須B－坏	表 土	12.9 4.2 5.3	底部から体部にかけて直線気味に開き、口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。	赤色スコリア状物質を含む。
10 － 7 11図版	須A－坏	表 土	11.9 3.9 6.9	底部から体部にかけて内弯し口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。体部内面に粘土紐の巻き上げ痕あり。	ほぼ完形。海綿骨針を含む。
10 － 8 12図版	須A－坏	表 土	12.8 4.9 6.3	底部から体部にかけて内弯し口縁部はやや直立気味に開く。	底部回転糸切り。口縁部に粘土紐の巻き上げ痕あり。	完形。黒色スコリア状物質を含む。
10 － 9	須A－皿	表 土	13.6 2.8 5.7	底部から体部にかけて直線気味に開き、口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。	底部写残存。口縁一部残存。

7人孔

土器一覧

挿図	図版	種別器形	出土位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
10	10	須A－坏	表土	12.3 3.7 5.5	底部から体部にかけて直立気味に開き、口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り、口縁に粘土の継ぎ目あり。	底部残存。海綿骨針を含む。
10	11	須A－坏	表土	17.1 6.0 9.1	底部から体部にかけて内彎し口縁部でやや外反する。	体部から口縁部にかけて、ロクロによるナデ。底部は回転糸切り後、外縁部ヘラ削り。	底部片残存。海綿骨針を含む。
10	12	須A－羽釜	表土	—— 3.7	底部は「ハ」の字状に開く。	ロクロ整形。	片残存。
10	13 12図版	須A－長頸瓶	表土	8.5 10.0	口頸部ラッパ状に開く。	ロクロ整形、頸部と胴部の接合は三段継ぎ。	
10	14 11図版	須B－壺	表土	—— 9.6	最大径は肩部にあり。	外面は肩・胴部とも横ナデ。一部ヘラ削り。内面の肩部に指頭痕あり。	胴部のみ残存。海綿骨針を含む。
11	1 12図版	灰－坏	表土	—— 1.8 6.0	高台部分直立した四角形を呈す。	高台貼り付け後、ロクロによるナデ。底部内面に焼合の痕あり。施釉は流しかけ。	底部残存。釉は薄黄緑色
11	2	灰－坏	表土	—— 1.6 7.0	底部外面に段を有する。高台は三角形を呈する。	高台貼り付け後、ロクロによるナデ。体部に点々と釉がかかる。	底部破片
11	3	灰－坏	表土	—— 1.9 7.3	高台部分やや内彎する三角高台である。	底部ロクロによるヘラ削り後高台を付け、ロクロによるナデ。	破片。
11	4	灰－坏	表土	—— 1.9 7.0	高台部分やや内彎する三角高台である。	高台部分付着後、ロクロによる横ナデ。施釉は漬け掛け。	底部残存。釉は緑色。
11	5	灰－坏	表土	—— 2.0 8.0	高台部分やや内彎する三角高台である。	底部内面に重ね焼痕あり。高台部分付着後ロクロによるナデ。	底部片残存。底部内面硯に使用した可能性あり。
11	6	灰－壺	表土	—— 3.8 8.4	高台部分「ハ」の字状に開く三日月型である。	体部下端より底部をヘラ削り後、高台付着し横ナデ。	底部片割残存。
11	7	灰－坏	表土	—— 2.85 7.6	高台部分「ハ」の字状に開く、逆台形高台である。	高台部ロクロによる横ナデ。底部内面重ね焼痕あり。施釉は流け掛け。	内外面スス付着、釉は薄灰緑色。
11	8	灰－壺	表土	—— 4.0 5.9		底部回転糸切り。	
11	9	灰－長頸壺	表土	12.7 1.75	口頸部ラッパ状に開く。	頸部内外面ともロクロによる横ナデ。施釉は刷毛塗り。	口頸部の破片。
11	10	灰－長頸壺	表土	—— 7.65		頸部内外面ともロクロによる横ナデ。刷毛塗り。	頸部破片。

土 器 一 覧

7人孔

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
11 － 11	灰－ 長頸壺	表 土	—— 4.5		ロクロ整形によるナデ。口頸部と胴部の接合は二段継ぎ。	破片
11 － 12	灰－ 長頸壺	表 土	—— 1.6		ロクロ整形によるナデ。口頸部と胴部の接合は三段継ぎ。	破片
11 － 13	灰－壺 高台付	表 土	—— 4.0 10.0	高台部分「ハ」の字状に開く。三角高台である。	ロクロ整形によるナデ。刷毛塗り。	破片
11 － 14	灰－壺	表 土	—— 1.2 8.8	高台部分直立する三角高台である。	ロクロ整形によるナデ。	底部破片
11 － 15	須A－坏	黒褐色土	12.0 4.0 6.8	底部から口縁部にかけて、やや直線気味に立上り、口縁部はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り後、外縁部ヘラ削り。	与残存
11 － 16	須A－壺	黒褐色土	8.6 6.7	肩部「く」の字状を呈す。	ロクロ整形、体部内外面ナデ。口縁部ナデ。	口縁部与残存。

8人孔

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
12 － 1	須B－坏 高台付	S D73－ A期 フ ク 土	—— 2.3 7.0	高台部分三角である。	底部回転糸切り。高台貼り付後横ナデ。	底部のみ。赤色スコリア状物質含む。
12 － 2	須B－坏	S D73－ A期 フ ク 土	—— 2.7 6.0		底部回転糸切り。	底部のみ。赤色スコリア状物質含む。
12 － 3 12図版	須B－坏 高台付	S D73－ A期 フ ク 土	—— 3.0 8.4	高台部分は強く外反する。	ロクロ整形による高台部分横ナデ。	高台のみ。赤色スコリア状物質含む。
12 － 4 12図版	須B－ 器台	S D73－ A期 フ ク 土	4.7 11.7	台部は直線ぎみに開き下端は外反する。	ロクロ整形によるナデ。粘土の継ぎ目有り。	台部のみ。スス付着赤色スコリア状物質含む。
12 － 5	須B－鉢 高台付	S D73－ A期 フ ク 土	—— 5.8 16.6	器肉は厚い。	ロクロ整形による横ナデ。	台部一部残存。
12 － 6	土－甕 台 付	S D73－ A期 フ ク 土	—— 4.75 ——		底部内面タタキ痕有り。体部内外面横ナデ。	台部内面スス付着 台部一部残存。
12 － 7 12図版	須A－坏	S D73－ A期 フ ク 土	13.3 3.9 5.1	底部より口縁部にかけて外傾する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	ほぼ完形。

8人孔

土 器 一 覧

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
12 － 8 12図版	須A－坏	SD73－ A期 フク土	12.4 3.85 5.4	底部より口縁にかけて内彎しながら外傾し口縁部は、外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	完形。
12 － 9	須B－坏	SD73－ A期 フク土	12.5 4.5 5.25	底部より、体部にかけやや内彎する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	½残存。底部、スス付着
12 － 10	須A－坏	SD73－ A期 フク土			ロクロ整形	破片。墨書文字有 文字は不明。
12 － 11	須B－皿	SD73－ A期 フク土	—— 1.9 4.9	底部より、体部にかけて、大きく開く。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	底部残存。
12 － 12	須A－坏 高台付	SD73－ A期 フク土	—— 2.5 7.2	高台部分「ハ」の字状に開く三角高台。	底部回転糸切り。高台貼り付け後横ナデ。	底部のみ。
12 － 13 12図版	須A－皿 高台付	SD73－ A期 フク土	14.5 2.0 6.4	底部より口縁にかけて大きく開く水平に近い。	底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ。	½残存。
13 － 1	須A－坏 高台付	SD73－ A期 フク土	—— 3.4 8.1	高台部分「ハ」の字状に開く三角高台。	ロクロ回転による糸切り後、高台部を付ける。先端部ヘラ削り。	底部のみ。
13 － 2	須A－坏 高台付	SD73－ A期 フク土	—— 3.2 9.3	高台部分は台形を呈す。	ロクロ回転糸切り後、高台部を付けナデ。	底部のみ。
13 － 3	須A－蓋	SD73－ A期 フク土	—— 2.8	宝珠状つまみ。	つまみの部分ロクロ回転によるナデ。	つまみ残存。
13 － 4	須A－蓋	SD73－ A期 フク土	—— 1.5	宝珠状つまみ。	つまみの部分天井部ロクロによるヘラ削り。	つまみ部分と天井部残存。
13 － 5	須A－蓋	SD73－ A期 フク土	—— 1.7	擬宝珠状つまみ。	天井部ナデとヘラ削り。	つまみ部分と天井部残存。
13 － 6	須A－鉢	SD73－ A期 フク土	—— 6.8 8.7	底部から体部にかけ直立ぎみに立上る。器肉は厚い。	底部内面ロクロによるナデ、外面はヘラ削り。体部粘土ひもまき上げ痕有り。	½残存。
13 － 7	須A－ 大甕	SD73－ A期 フク土	40.9 4.8 ——	口縁はラッパ状に開く。	口縁部ロクロによるナデ。	口縁部破片
13 － 8	須A－壺	SD73－ A期 フク土	17.1 6.9 ——	口縁部は鶏頭状。	口縁部ロクロによるナデ。	口縁部破片
13 － 9	須A－甕	SD73－ A期 フク土	—— 4.5 12.4	器肉は厚い。	高台部ロクロによるナデ。	底部破片

土器一覧

挿図	図版	種別器形	出土位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
13	10	須A－大甕	S D73－A期 フク土		口縁部は鍋頸状。	頸部外面、櫛状工具による波状の跡あり。	口縁部破片
13	11	須A－大甕	S D73－A期 フク土	―― 3.7 12.95	器肉は厚い。	体部内面、下部ヘラ状工具によるナデ。	底部体部一部残存
13	12	灰－埴	S D73－A期 フク土	―― 3.5 7.7	高台部分やや内彎した三日月高台。	ロクロ整形高台部貼つけ後ナデ。施釉は漬け掛する。	底部破片釉は灰白色。
13	13 13図版	灰－埴	S D73－A期 フク土	―― 1.6 6.6	高台部分やや内彎した三日月高台。	ロクロ整形高台部貼り付後ナデ。	底部与残存釉は薄黄色。
13	14 13図版	灰－埴	S D73－A期 フク土	―― 2.0 6.5	高台部分やや外反した台形を呈す。	ロクロ整形、高台部貼り付後ナデ。内面に重ね焼き跡有り。施釉は刷毛塗りする。	底部与残存釉は黄緑色。
13	15	灰－埴	S D73－A期 フク土	―― 1.5 6.8	やや内彎した三日月高台。	ロクロ整形、高台部貼り付後ナデ。施釉は刷毛塗りする。	底部のみ。釉は薄緑色。
13	16 13図版	灰－埴	S D73－A期 フク土	―― 3.0 6.6	高台部分直立した三日月高台。	ロクロ整形、高台部貼り付後ナデ。施釉は刷毛塗りする。	底部残存体部一部分、釉は薄緑色。
13	17	灰－段皿	S D73－A期 フク土	18.8 2.0 ――	体部内外面に段を有し口縁部直線に開く。	ロクロ整形。	口縁部破片
13	18 13図版	灰－手付鉢	S D73－A期 フク土	―― 2.5 10.3		ロクロ整形、糸切り後、外縁部ヘラ削り。施釉は刷毛塗りする。	底部一部残存
13	19 13図版	青磁－坏	S D73－A期 フク土	―― 1.9 5.4	底部外面凹む。	ロクロ整形、底部蛇の目高台。	底部与残存釉は薄黄緑色。
14	1	土－坏	S D73－B期 フク土	11.7 2.4 ――	底が浅く丸底。	底部ヘラ削り。体部内外面共にナデ。	酸化鉄分によるサビ、スス付着。破片
14	2	土－坏	S D73－B期 フク土	―― 1.9 6.8	体部下部内彎する。	底部ヘラ削り。体部指頭痕あり。	底部のみ与残存
14	3	土－坏	S D73－B期 フク土	11.0 4.0 5.5	底部から口縁部にかけてやや内彎し、口縁部はやや外反する。	底部手持ヘラ削り。体部内外面共ナデ。指油痕有り。	与残存
14	4	土－坏	S D73－B期 フク土	11.0 3.2 8.0	器肉は薄い。底部から口縁部にかけ直線ぎみ立上り、口縁部は内彎する。	底部手持ヘラ削り、体部内外面共ナデ。指頭痕有り。	赤色スコリア状物質を含む。破片
14	5	土－坏	S D73－B期 フク土	―― 2.0 5.25		底部内面から体部にかけヘラ磨き。	与残存 赤色スコリア状物質を含む。

土器一覧

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
14 － 6	須B－坏 高台付	S D73－ B期 フク土	—— **2.0** 6.5	高台部台形状。	底部糸切り後高台部を貼り付け後ナデとヘラ削り。	底部1/2と体部破片
14 － 7 13図版	土－坏	S D73－ B期 フク土	18.8 8.9 8.4	底部から体部にかけ直線ぎみに立ち上り、口縁部はやや外反する。	底部ナデ体部内外面上端にかけ横ナデ、体部外面指頭痕あり。	1/2残存底部内面から体部にかけてスス付着赤色スコリア状の物質有り。
14 － 8	土－甕	S D73－ B期 フク土	15.2 **4.25** ——	「コ」の字状の口縁を有する。	口縁部内外面横ナデ。	口縁部のみ。
14 － 9 13図版	須A－坏	S D73－ B期 フク土	13.2 3.5 7.7	底部から口縁部にかけて直線ぎみに立ち上がる。	底部ロクロ回転糸切り後、外縁部へラ削り。	1/2残存
14 － 10 13図版	須A－坏	S D73－ B期 フク土	12.4 3.8 7.2	底部から体部にかけやや外傾し、体部上端やや内弯し、口縁部外反する。	底部ロクロ回転糸切り、体部ロクロによるナデ。口縁部ナデ。	完形。海綿状骨針の物質有り。
14 － 11 13図版	須A－坏	S D73－ B期 フク土	12.15 3.25 7.3	底部から口縁部にかけてやや直線的。口縁部やや外反する。	底部ロクロ回転糸切り、体部口縁部ロクロによる横ナデ。	完形。
14 － 12	須A－坏	S D73－ B期 フク土	12.9 3.6 7.4	底部から体部にかけてやや内弯し、口縁部外反する。	同上	1/2残存。 粘土の継ぎ目有り。
15 － 1	須A－坏	S D73－ B期 フク土	13.4 4.1 6.3	体部はやや内弯し、口縁部にかけやや外反する。	底部ロクロ回転糸切り。体部粘土ひも有。体部、内外面ロクロによるナデ。	1/2残存
15 － 2	須A－坏	S D73－ B期 フク土	10.35 3.7 6.3	底部から口縁部にかけ直立ぎみ、全体にやや器肉は厚い。	底部ロクロ回転糸切り。体部内外面共にロクロによるナデ。	1/2残存 一部スス付着
15 － 3	須A－坏	S D73－ B期 フク土	13.7 **4.3** ——	体部はやや外反し器肉は薄い。	体部内外面共ロクロによるナデ。口縁部、粘土巻上げ痕有り。	底部なし。体部内面スス付着
15 － 4	須A－坏	S D73－ B期 フク土	—— **2.4** 4.7	全体に器肉は薄く、底部から体部にかけ外弯する。	底部ロクロ回転糸切り。	1/2残存
15 － 5 13図版	須B－坏	S D73－ B期 フク土	15.8 5.4 6.25	体部は内弯し、口縁部外反する。	底部ロクロによる糸切り。体部内外面ロクロによるナデ。	一部欠損 口縁部スス付着。
15 － 6 14図版	須A－坏 高台付	S D73－ B期 フク土	13.7 3.9 9.4	底径が大きく器肉は厚い。	底部糸切り、高台部を貼り付け後、体部口縁部ナデ。粘土ひも有り。	1/2残存 内外面スス付着。
15 － 7 14図版	須A－皿	S D73－ B期 フク土	15.3 2.3 6.0	底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。	底部ロクロによる糸切り。体部内面はロクロによるナデ。	1/2残存

土器一覧

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
15 － 8	須A－皿	S D73－ B期 フク土	—— 2.2 7.7		底部ロクロによる糸切り。	底部のみ鉄さび付着。
15 － 9	須A－壺 (高台付)	S D73－ B期 フク土	—— 4.7 7.15	底部から体部にかけ直立ぎみに立ち上る。器肉は厚い。	底部ロクロによる糸切り後中心を残し、その他ナデ。	½残存
15 － 10	須A－塊	S D73－ B期 フク土	15.0 5.5 7.5	体部中央内弯し、口縁、高台は外反する。	体部ロクロによるナデ。口縁部ナデ。	½残存
15 － 11 14図版	須A－壺	S D73－ B期 フク土	—— 3.7 8.9	高台部分「ハ」の字状に開く台形を呈す。	底部静止糸切り後、高台を付ける。	底部½残存 自然釉付着。
15 － 12	須A－蓋	S D73－ B期 フク土	23.6 4.0	口縁部内傾し断面は長方形を呈す。	ロクロ整形。天井部ヘラ削り。	口縁部のみ鉄サビ付着。
15 － 13	須A－蓋	S D73－ B期 フク土	—— 3.5	擬宝珠状 天井部器肉は厚い。	ロクロ整形。天井部ヘラ削り。	天井部¼残存 スス付着。
15 － 14	須A－蓋	S D73－ B期 フク土	16.9 3.6	口縁部先端部分やや外反する。	ロクロ整形。天井部ヘラ削り。	口縁部のみ。
16 － 1	須A－蓋	S D73－ B期 フク土	—— 1.6		天井部外面はヘラ削り。	½残存
16 － 2	須A－ 長頸瓶	S D73－ B期 フク土	—— 8.5 ——		首部外面ロクロ回転ナデ。二段雑ぎ、胴部ロクロ回転によるナデ。	½残存
16 － 3 14図版	須A－ 羽釜	S D73－ B期 フク土	—— 3.3 ——		ロクロ整形。羽の部分体部につけた後ナデ。	¼残存 鉄さび付着。
16 － 4	灰 － 埴	S D73－ B期 フク土	—— 1.7 7.4	高台部分外反した台形を呈する。	底部ロクロによる糸切り後高台部貼り付後ナデ。	底部のみスス付着。 釉は薄緑色。
16 － 5 14図版	灰 － 壺 (高台付)	S D73－ B期 フク土	—— 10.0 5.25	肩部のはりが強い。器肉は厚い。高台はカギ形を呈する。	高台部ロクロによるナデ。胴部ロクロによるナデ。後中央部分ヘラ削り。	首部欠損 肩部に緑色の釉。
16 － 6	灰 － 壺 (高台付)	S D73－ B期 フク土	—— 3.9 7.8	器肉はやや厚い。高台部は長方形を呈する。	高台部ロクロによるナデ。	底部½残存 釉は緑色。
16 － 7	灰－ 長頸瓶	S D73－ B期 フク期	9.4 4.4 ——	口縁部はラッパ状に開く。	頸部ロクロによるナデ。施釉は漬がけ。	口縁部¼残存
16 － 8 14図版	須A－蓋	表 土	—— 2.0	高台状つまみ。	天井部中央ロクロ回転によるヘラ削り。	天井部残存 天井部内面硯に使用した痕跡有り。

8人孔

土器一覧

挿図 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
16 － 9 14図版	須A－蓋	表土	18.8 5.0	宝珠状つまみ。天井部から口縁部にかけて内彎する。	天井部ロクロ回転によるヘラ削り、体部ロクロによるナデ。	口縁部一部欠損
16 － 10 14図版	須A－壺 (高台付)	表土	—— 9.5 10.0	高台部は低く「ハ」の字状、底部と台部の間に工具による穴有り、底部から体部にかけて大きく内彎する。	ロクロ整形高台部ヘラ削り、底部内面タタキ痕有り。体部ヘラ削り、体部中央より上に太い沈線あり。	完残存
16 － 11	灰－蓋	表土	—— 6.65 11.5	器肉は厚い。台部は低く内面凹む。	ロクロ整形高台部貼り付け後ナデ。体部内面ナデ。外面はヘラ削り、施釉は漬け掛け。	高台部体部破片 釉は緑色。
16 － 12 14図版	灰－ 長頸瓶	表土	12.0 10.7	口縁部ラッパ状。	頸部ロクロによるナデ。頸部と胴部は二段つなぎである。施釉は、はけ塗り。	頸部完残存 釉は緑色。

鐙瓦一覧

3人孔

挿図図版	出土位置	直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区 幅	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	備考
17－6 16図版	表土	11.1	5.8	1+4	11.1	4.8	T8							22	間弁を有する。 蓮子はわずかに残存。

4人孔

18－1 16図版	表土	20.0	5.5	1+6	16.6	5.5	T8	1.7	0.3	a	14	0.2	a	3.1	瓦当裏面指ナデ（？）。 海綿骨針を含む。

6人孔

20－2 20図版	表土	8.6	2.0	1+6	6.6	5.0	T7	1.1			1	0.5	Ba	5.3	

7人孔

29－1 28図版	表土	22.2	7.6	1+6	18.6	5.5	T8	1.8			1.8	0.8	Ba	10.2	海綿骨針を含む。

宇瓦一覧

2人孔

挿図図版	出土位置	寸法 上弦弧幅	寸法 下弦弧幅	寸法 弧深	寸法 厚さ	内区 厚さ	内区 文様	外区 上 厚さ	外区 上 文様	外区 下 厚さ	外区 下 文様	脇区 幅	脇区 文様	文様深さ	全長	備考
17－4 15図版	表土	5.5	1.3		3.6		G							0.3	7.0	顎F1－a。

4人孔

18－2 16図版	表土	10.0	4.5		5.6	3.7	HK	0.9	a	1.0	a	4.5	0.3	a	10.7	顎G2－a。 瓦当面及び女瓦部凸面一部朱付着、女瓦部凸面縦位縄目叩き、黒色スコリア含む。
18－3 17図版	表土	10.2	11.8		3.7		G					4.0		0.6	15.6	F1－a。 女瓦部凹凸両面縦ナデ、海綿骨針を含む。

6人孔

20－3 20図版	表土	15.5	15.0		3.8		G					4.0		0.75	12.9	顎E－a。 文様定型横ナデによる施文。女瓦部凹面糸切り痕。凸面不整形。
20－4 20図版	暗茶褐色土	14.5	8.7		5.3	3.9	HK (右→左)			1.3	a			0.3	18.9	顎G－1。 女瓦部凸面縄目叩き。
21－1 21図版	暗茶褐色土	16.5	18.1		5.0	3.7	HK (右→左)	0.4	a	0.9			a	0.2	7.5	顎F2－a。 海綿骨針を含む。

7人孔

27－1 26図版	SD73 フク土	6.5	7.8		4.0	2.0	H	0.8	a	1.0	a			0.1	8.6	顎E－C。

8人孔

34－1 37図版	表土	17.7	17.4		4.2		KK		a		a	4.1	a	0.2	20.2	顎F2－C。 女瓦部凸面縦位縄目叩き（1.15本）瓦当部左側端面に「王」のヘラ書き文字。黒色スコリア含む。
34－2 36図版	表土	9.5	7.8		4.8	3.6	HK (左→右)	0.5	a	0.7	a	5.5	a	0.3	8.1	顎F2－a。 海綿骨針を含む。

6人孔

男瓦一覧

挿図 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
						凹面			凸面		端面		
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
21－2 21図版	表土			11.3	1.6		23×25	不整形	縦目	横ナデ（回転利用？）	広側端ヘラ削り		凹面に判読不明のヘラ書き文字。
21－3 21図版	表土	12.9	15.3	42.1	1.9		21×22	両側端狭幅広くヘラ削り	縦目	全面板状工具による横ナデ	全端面ヘラ削り		凹面に粘土板合せ目S。
22－1 21図版	表土	11.4		22.4	1.75	粘土紐6本左巻き上げ	19×23	広端を除く3端幅狭くヘラ削り		板状工具による横ナデ	狭端指ナデ左・右側端面ヘラ削り		海綿骨針、黒色スコリアを含む。
22－2 22図版	表土		24.3	18.9	2.7	粘土紐	24×27	狭端を除く3端幅狭くヘラ削り	縦目	縦目叩き良 全面縦ナデ	狭端を除く3端面ヘラ削り		凹面縦ナデ、広端小さく隅切り。

7人孔

男瓦一覧

挿図 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
						凹面			凸面		端面		
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
27－2 27図版	SD73 フク土		21.5	17.5	2.0	粘土紐左巻き上げ	18×19	狭端を除く3端幅広くヘラ削り		左回転ナデ	狭端を除く3端ヘラ削り		凸面に「豊」の押印。黒色スコリア含む。
27－3 27図版	SD73 フク土			5.4	1.9		20×23	側端幅狭くヘラ削り	縦目	側端幅狭くヘラ削り	右側端ヘラ削り		凹面「十」のヘラ書き。
29－2 29図版	表土		18.8	24.0	2.4		30×33	広端幅広くヘラ削り		広端指ナデその他横ナデ	広端・左側端ヘラ削り		凹面布目ぎ目指ナデ消し。

8人孔

30－5 31図版	SD73 A 期		10.5	10.7	2.5		27×28	広端幅広くヘラ削り		全面横ナデ	広端ヘラ削り		広端面に「十」のヘラ書き。
30－6 31図版	SD73 A 期		5.1	12.1	1.9		27×32	広端・左側端幅狭くヘラ削り		全面回転ナデ	広端・右側端ヘラ削り		側端面自然釉付着。
31－1 31図版	SD73 A 期		7.5	7.8	1.8	粘土紐	38×37	広端幅狭くヘラ削り		回転ナデ、広端幅狭くヘラ削り	広端・右側端ヘラ削り		広端面小さく隅切り。海綿骨針、黒色スコリア含む。
31－2 31図版	SD73 A 期		10.3	13.1	1.6		全面縦ナデ消し	広端・左側端狭くヘラ削り		左右側端幅狭くヘラ削り	広端・右側端ヘラ削り		凹面全面縦ナデ、広端面やや大きく隅切り。
31－3 32図版	SD73 A 期		5.4	15.5	4.2		33×30	広端・右側端幅狭くヘラ削り	縦目	叩き後全面縦ナデ	広端・左側端ヘラ削り		凹面部分的に縦ナデ（指）、広端面小さく隅切り。
31－4 32図版	SD73 A 期			13.6	1.6		全面縦ナデ	側端幅狭くヘラ削り		全面縦ナデ	左側端ナデ		凹面全面縦ナデ判読不明朱墨書。海綿骨針、黒色スコリア含む。
32－6 34図版	SD73 A 期		9.4	12.4	2.5		22×19	広端・右側端幅広くヘラ削り			広端・左側端ヘラ削り		黒色スコリア含む。

女瓦一覧

掲載図版	出土位置	寸法				成・整形の特徴						備考
						凹面			凸面		端面	
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
1人孔												
17－1 15図版	表土			9.45	2.7		16×20		縄目L 9本			凹面に「在」のヘラ書き文字。
17－2 15図版	表土			3.8	2.2		17×19		縄目L 7本			凹面に「大」のヘラ書き文字。
17－3 15図版	表土			13.0	2.7		24×23	左側端幅狭くヘラ削り	格子目(小)	叩き密	左側端ヘラ削り	海綿骨針及び黒色スコリア含む。
2人孔												
17－5 15図版	表土			8.6	2.6		17×17	側端縁幅狭くヘラ削り	格子目		右側端ヘラ削り	赤色スコリア含む。
3人孔												
17－7 16図版	表土	6.1		11.9	2.5		20×18	端縁幅狭くヘラ削り	縄目L	側端縁に斜行	狭端・右側端ヘラ削り	凹凸両面糸切り同一方向。狭端縁に対して斜行（右上り、左下り）海綿骨針含む。
17－8 16図版	表土		1.0	10.9	2.5			縦ナデ、横ナデ端縁幅狭くヘラ削り	板目	広端縁にやや平行、叩き密	広端ヘラ削り	広端部粘土折り返し。海綿骨針及び黒色スコリア含む。
4人孔												
18－4 17図版	表土			7.6	2.4			側端縁幅狭くヘラ削り			右側面ヘラ削り(2面)	凸面「大井」の押型文字。海綿骨針を含む。
18－5 16図版	表土	8.8		12.6	2.2		14×19	狭端縁幅広く側端縁幅狭くヘラ削り	格子目	叩き疎	狭端・右側端ヘラ削り	海綿骨針を含む。
18－6 17図版	表土		12.0	21.9	2.7	粘土紐	15×17	端縁幅狭くヘラ削り	縄目L 14本	小単位側端縁に対しやや弧を描く	広端ヘラ削り、右側端指ナデ	凹面「中」の横書文字。
5人孔												
19－2 18図版	表土		9.5	10.7	2.8		18×21	左側端幅広くヘラ削り	斜格子	叩き疎	広端・左側端ヘラ削り	凸面「在」の押型文字。赤色スコリア含む。
19－6 19図版	表土		15.7	28.8	2.5		14×18	両側端幅広く、ヘラ削り。	正格子	側端縁に対して弧(A)を描く(縊)	狭端を除く3端面ヘラ削り	全体に自然釉付着、凹面中央「男」のヘラ書き文字。
20－1 19図版	表土		7.1	25.65	2.8	粘土横紐？	28×23	広端・左側端幅やや広くヘラ削り	縄目L 12本	側端縁に対して弧を描く	広端・左側端ヘラ削り	縄目押圧、広端面「ii」のヘラ書き文字。凸面端縁幅広くヘラ削り。
19－3 18図版	黒褐色土		15.55	13.75	2.5		21×19	側端幅狭くヘラ削り	縄目 9本	側端縁に平行(長単位)	左側端ナデ	広端面ワラ状圧痕多し。赤色スコリア含む。
19－4 18図版	黒褐色土			8.2	2.2			不整形	縄目L	側端縁に平行	右側端ヘラ削り(二面)	凹面「矢口」のヘラ書き文字。
19－5 19図版	暗茶褐色土			9.5	2.4				縄目 8本		左側端ヘラ削り	凹面全面横ナデ、「口右小」ヘラ書き文字。黒色スコリア含む。

6人孔

女瓦一覧

挿図 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
						凹面			凸面		端面		
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
22－3 22図版	表土	4.7		7.2	1.9		24×21	狭端縁幅広く ヘラ削り	縄目L 11本		狭端ヘラ削り		凹面「大量」の押印。海綿骨針を含む。
23－1 22図版	表土		28.5	29.6	2.35		18×16	広端左側端縁幅狭く ヘラ削り	縄目L 7本	弧を描く	狭端除く3端面ヘラ削り		
23－2 22図版	表土			15.3	2.35		21×22	側端縁幅狭く ヘラ削り	斜格子目	叩き、やや疎	左側端ヘラ削り		凹面に判読不明のヘラ書き。
23－3 23図版	表土	13.7		18.1	2.1			狭端縁幅狭く ヘラ削り	縄目L	側端縁に斜行	狭端・左側端ヘラ削り		凹面全面縦ナデ、海綿骨針を含む。
24－1 23図版	表土		12.9	16.2	2.3		18×18	広端・右側端縁広くヘラ削り	格子目	叩き密	広端・右側端ヘラ削り		海綿骨針、黒色スコリア含む。
24－2 23図版	表土		17.45	14.1	2.8		17×14	広側端縁幅狭くヘラ削り	縄目L 9本	側端縁に平行斜行混在	広端・左側端ヘラ削り		凹面に判読不明の朱墨書文字。
24－3 24図版	表土		18.8	19.2	2.6		18×21	端縁幅広くヘラ削り	斜格子目	叩きやや疎	広端・左側端ヘラ削り(二面)		凹面「宜」の押印。凸面「産」の押型。黒色スコリア含む。
24－4 24図版	表土		12.1	12.8	2.6		17×21	端縁幅狭くヘラ削り	縄目L 7本	側端縁に斜行	広端ヘラ削り左側端ヘラ削り(二面)		海綿骨針を含む。
25－1 24図版	表土			15.95	2.6		18×18	側縁幅狭くヘラ削り	縄目L 9本	側端縁にほぼ平行	左側端ヘラ削り		板状の形(一枚作り?)。凹面に指頭痕、海綿骨針を含む。
25－2 25図版	表土	12.7		24.2	3.3		21×22	狭端側端幅狭くヘラ削り	縄目L 6本	側縁に対してやや弧を描く	狭端・右側端ヘラ削り(三面)		
25－3 25図版	表土		21.5	25.3	2.65		26×27	側端幅広くヘラ削り	格子目	叩き疎	広端・左側端ヘラ削り		凸面部分的に縦ナデ。海綿骨針、赤色スコリア含む。
26－1 25図版	表土	11.1		19.7	2.6		19×19	狭端縁幅広く左側端狭くヘラ削り	縄目L 7本	側端縁にほぼ平行叩き疎	狭端・左側端ヘラ削り		海綿骨針、赤色スコリアを含む。
26－2 26図版	表土	21.1		21.0	2.55		17×15	端縁幅狭くヘラ削り	縄目L 10本	八字形やや弧を描く(円弧B)	狭端ヘラ削り、右側端指ナデ		凸面棒状圧痕(1条)。

7人孔

27－4 27図版	SD73 フク土		24.5	16.6	2.6		18×20	広端・左側端縁幅広くヘラ削り	縄目L 7本	叩きやや密 側端縁に平行	広端・左側端ヘラ削り		広端面にワラ状圧痕多し 凹凸両面糸切り(両方向右上り)。
28－1 27図版	SD73 フク土		11.9	9.3	2.1		18×23	右側端幅狭くヘラ削り	縄目L 10本	側端縁に斜行	広端・右側端ヘラ削り(二面)		凹面横ナデ、広端側隅切り。
28－2 28図版	SD73 フク土	10.9		15.7	2.7		21×23	狭端・左側端幅狭くヘラ削り	縄目	側端縁に斜行叩き疎	狭端・左側端ヘラ削り		
28－3 28図版	SD73 フク土		14.6	27.2	2.5		24×27	広端・左側端縁幅狭くヘラ削り	縄目L 11本		広端・左側端ヘラ削り		凸面広端寄りに「上」のヘラ書き文字。
28－4 28図版	SD73 フク土		17.3	15.7	2.0		20×19	広端・右側端縁幅狭くヘラ削り	縄目 8本	側端縁に斜行	広端・右側端ヘラ削り		凹面に判読不明朱墨書。凸面棒状圧痕

7人孔

女瓦一覧

挿図 図版	出土位置	寸法				成・整形の特徴							備考
							凹面		凸面		隅面		
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
29－3 29図版	表土			11.5	2.7		18×16	端端幅広くヘラ削り	格子目	叩き痕	右左側端ヘラ削り		境瓦(女瓦半載)。海綿骨針、黒色スコリア含む。
29－4 30図版	表土		24.5	15.7	3.0	粘土積縫	20×20	広端・左側端縁幅狭くヘラ削り	縄目L 8本	やや弧を描く	広端ヘラ削り、左側端指ナデ		
30－1 30図版	表土			15.7	2.2		17×20		縄目L 8本				凹面に「国成」のヘラ書き文字。黒色スコリアを含む。
30－2 29図版	表土	3.0		9.8	1.8		24×17	端縁幅狭くヘラ削り	縄目L 10本		狭端ヘラ削り		凹面に「藤空」のヘラ書き文字。
30－3 30図版	表土	8.6		17.7	1.8		24×27	狭端右側端幅広くヘラ削り	格子目		狭端ヘラ削り、右側端ヘラ削り(二面)		
30－4 31図版	表土			20.0	2.2		20×17	側縁幅狭くヘラ削り	縄目L 6本	側端縁に斜行	右側端ヘラ削り		凹面に「＋」の橫骨文字(凉体陽刻)。

8人孔

31－5 32図版	SD73 A 期		2.6	10.2	2.9		18×18	広端ヘラ削り	斜格子		広端ヘラ削り		凸面「狂」の押型文字。
31－6 32図版	SD73 A 期	5.5		10.6	1.8		15×18	狭端・右側端幅広くヘラ削り	縄目L 12本	側端縁に直行	狭端ヘラ削り右側端ヘラ削り(二面)		海綿骨針を含む。
31－7 33図版	SD73 A 期			17.4	2.3		18×19	側端幅広くヘラ削り	縄目L 9本	長単位(長≦12cm以上)側端縁に平行斜行溢在	左側端ヘラ削り		凹面糸切り痕跡著。
31－8 32図版	SD73 A 期		7.2	7.3	1.9		17×18	広端幅狭く側端幅広くヘラ削り	縄目L 7本		広端・左側端ヘラ削り		凹面に凸型の痕、凹面に布継ぎ目。海綿骨針を含む。
32－1 33図版	SD73 A 期	18.8		22.5	2.5		16×19	側端幅狭くヘラ削り	縄目L 10本	側端縁に対し弧を描く	狭端ヘラ削り左側端指ナデヘラ削り		
32－2 33図版	SD73 A 期	10.35		12.8	2.4		23×24	狭端幅広く右側端幅狭くヘラ削り	縄目L 12本	叩き目底押圧を受け不明瞭	狭端・左側端ヘラ削り		凹面に布束痕(端縁に平行)凸型1枚作り?。
32－3 34図版	SD73 A 期	11.4		8.7	2.3		28×21	端縁幅広くヘラ削り	縄目L	ナデ後叩き?	狭端ヘラ削り		
32－4 34図版	SD73 A 期	9.1		22.0	3.2		23×26	狭端幅広くヘラ削り	正格子目	やや雑な叩き	狭端不整形		
32－5 34図版	SD73 A 期	6.0		10.0	2.1		21×17	狭端・左側端幅狭くヘラ削り			狭端・左側端ナデ		
33－1 35図版	SD73 B 期			11.5	2.4		17×23	側端幅広くヘラ削り	正格子目	側端縁に斜行	右側端ヘラ削り(二面)		海綿骨針を含む。
33－2 35図版	SD73 B 期	8.3		8.9	2.3		23×22	狭端・左側端幅狭くヘラ削り	板目	側端縁に斜行	狭端不整形左側端ヘラ削り		
33－3 35図版	SD73 B 期	7.6		19.4	2.5		18×16	狭端・右側端幅狭くヘラ削り	縄目L 6本	側端縁に斜行	狭端・右側端ヘラ削り		赤色スコリアを含む。
33－4 36図版	SD73 B 期		12.4	13.4	2.5		18×14	広端・左側端幅狭くヘラ削り	縄目L 9本	側端縁に斜行	広端・左側端ヘラ削り		全体に自然釉付着、海綿骨針を含む。

8人孔

女瓦一覧

挿図図版	出土位置	寸法 狭端	寸法 広端	寸法 全長	寸法 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
33－5 36図版	SD73 B期		13.9	20.7	3.3		17×16	広端・左側端幅狭くヘラ削り	縦目L. 9本	側端縁に斜行	広端・ヘラ削り、左側端指ナデ	凹面に「上」逆字状骨文字(上一)。凸面に棒状圧痕 広端面に「キ」及び「○」のヘラ書き。
34－3 37図版	表土			10.9	2.3		21×22	側端幅広くヘラ削り	縦目 8本	側端縁に斜行	左側端ヘラ削り	凹面に枠板圧痕(幅3.5cm) 凸面側縁幅狭くヘラ削り

9人孔

34－4 37図版	SK286 フク土			11.8	2.1			側端幅広くヘラ削り	縦目L.	部分的に残存	右側端ヘラ削り	凸面指頭痕多し。 黒色スコリア含む。

6人孔

博一覧

挿図図版	出土位置	寸法 長辺	寸法 短辺	寸法 厚さ	表裏	側面	備考
26－3 26図版	表土	16.2	18.4	7.0	全面ヘラ削り、裏面部分的に布目圧痕残存	全面ヘラ削り	海綿骨針、黒色スコリア含む。
26－4 26図版	表土	23.8	16.8	6.0	全面ヘラ削り	全面ヘラ削り	海綿骨針を含む。

8人孔

石製品一覧

挿図図版	種別	出土位置	石質	寸法	重量	備考
38－5 41図版	砥石	SD73 B期	砂岩	長さ 6.2 幅 4.0 厚さ 1.7	65g	上面砥石として使用。

8人孔

鉄製品一覧

挿図図版	種別	出土位置	寸法	備考
38－6 41図版	不明	SD73A期	長さ 7.6 幅 5.2	

縄文土器一覧

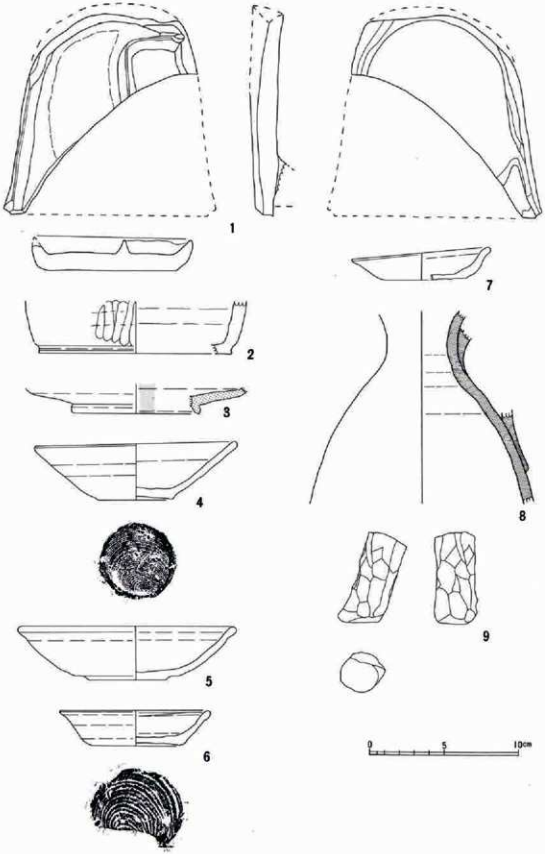
挿図 図版	器種 部位	出土 位置	文様構成要素	内面調整	備考
35 － 1 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線（小さい刺突）	ナデ	諸磯B式
35 － 2 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	押引き	ナデ	五領ヶ台式
35 － 3 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	縄文	ナデ（粗雑）	五領ヶ台式
35 － 4 38図版	深鉢 口縁部	8人孔 表土	押引き、隆帯	ナデ（荒）	勝坂式
35 － 5 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	連続爪形文様、隆帯、押引き	ナデ	勝坂式
35 － 6 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	連続爪形文様、隆帯	ナデ	勝坂式
35 － 7 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	押引き	ナデ（粗雑）	勝坂式
35 － 8 38図版	深鉢 口縁部 頸部	8人孔 黒褐色土	半截竹管による平行沈線、刺突条線隆帯	ナデ	曽利式
35 － 9 38図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	隆帯、沈線、条線	ナデ	加曽利E式
35 － 10 38図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	条線、沈線	ナデ（粗雑）	加曽利E式
35 － 11 38図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	沈線、条線	ナデ	加曽利E式
35 － 12 38図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	沈線	ナデ（粗雑）	加曽利E式
35 － 13 38図版	深鉢 口縁部	5人孔 黒褐色土	隆帯、沈線、縄文	磨（丁寧）	加曽利E式
35 － 14 38図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	隆帯、	ナデ（粗雑）	加曽利E式
35 － 15 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナデ	加曽利E式
35 － 16 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナデ	加曽利E式
35 － 17 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナデ	加曽利E式
35 － 18 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナデ	加曽利E式
35 － 19 38図版	深鉢 胴部	8人孔 表土	条線	ナデ	加曽利E式
35 － 20 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	柳目（6本単位）沈線	ナデ（粗雑）	加曽利E式
35 － 21 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線	ナデ	加曽利E式
35 － 22 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	柳目（12本単位）	ナデ（丁寧）	加曽利E式
35 － 23 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	条線	ナデ	加曽利E式

縄文土器一覧

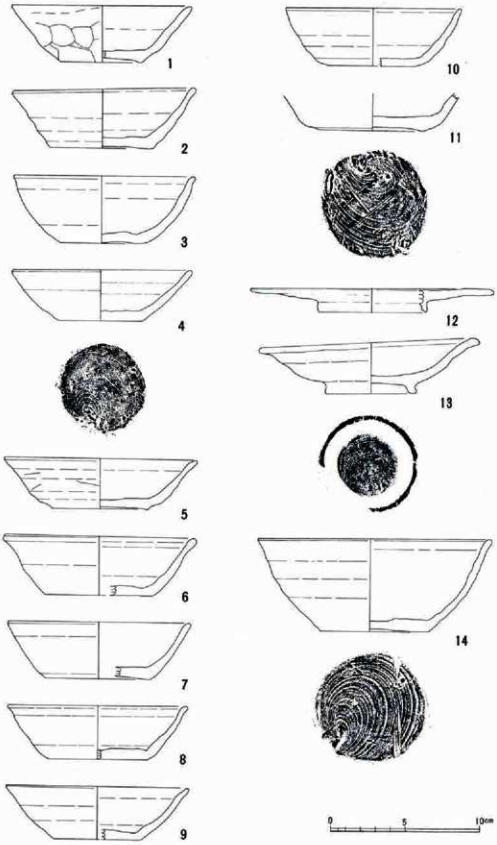
挿図 図版	器種 部位	出土 位置	文様構成要素	内面調整	備考
35 － 24 38図版	深鉢 胴部	8人孔 表土	撚目（6本単位）	ナデ	加曽利E式
36 － 1 38図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	撚目（5本単位）	ナデ	加曽利E式
36 － 2 39図版	深鉢 底部	8人孔 黒褐色土		磨（粗雑）	加曽利E式
36 － 3 39図版	耳栓	8人孔 黒褐色土	左巻、渦巻		加曽利E式
36 － 4 39図版	土錘 （半損）	8人孔 黒褐色土			片側刻み込み 周回磨　重量－20g
36 － 5 39図版	深鉢 把手	8人孔 黒褐色土		ナデ	称名寺式
36 － 6 39図版	深鉢 把手	8人孔 黒褐色土	沈線		称名寺式
36 － 7 39図版	深鉢 把手	8人孔 黒褐色土			称名寺式
36 － 8 39図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	沈線、縄文	ナデ（粗雑）	称名寺式
36 － 9 39図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	隆帯、沈線、刺突	ナデ（粗雑）	称名寺式
36 － 10 39図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線、縄文	ナデ	称名寺式
36 － 11 39図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線、縄文	ナデ	称名寺式
36 － 12 39図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線、縄文	ナデ	称名寺式
36 － 13 39図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線、縄文	ナデ	称名寺式
36 － 14 39図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線	ナデ	称名寺式
36 － 15 39図版	深鉢 胴部	8人孔 黒褐色土	沈線、刺突	ナデ	称名寺式
36 － 16 39図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	平行沈線、縄文、隆帯 押圧帯	磨	加曽利B式
36 － 17 39図版	深鉢 口縁部	8人孔 表土	隆帯、刺突	ナデ（丁寧）	加曽利B式
36 － 18 39図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	（口縁部、沈線）点列	ナデ（丁寧）	加曽利B式
36 － 19 39図版	深鉢 口縁部	8人孔 黒褐色土	無文	ナデ（丁寧）	加曽利B式
36 － 20 39図版	深鉢 口縁部　下部	8人孔 黒褐色土	（格子目状、沈線）	ナデ（丁寧）	加曽利B式
36 － 21 39図版	深鉢 底部	8人孔 黒褐色土	網代（摩滅）	ナデ（粗雑）	加曽利B式
36 － 22 39図版	深鉢 底部	8人孔 黒褐色土	網代	ナデ	経、2本潜り、1本超え 緯、2本超え、1本潜り

石器一覧

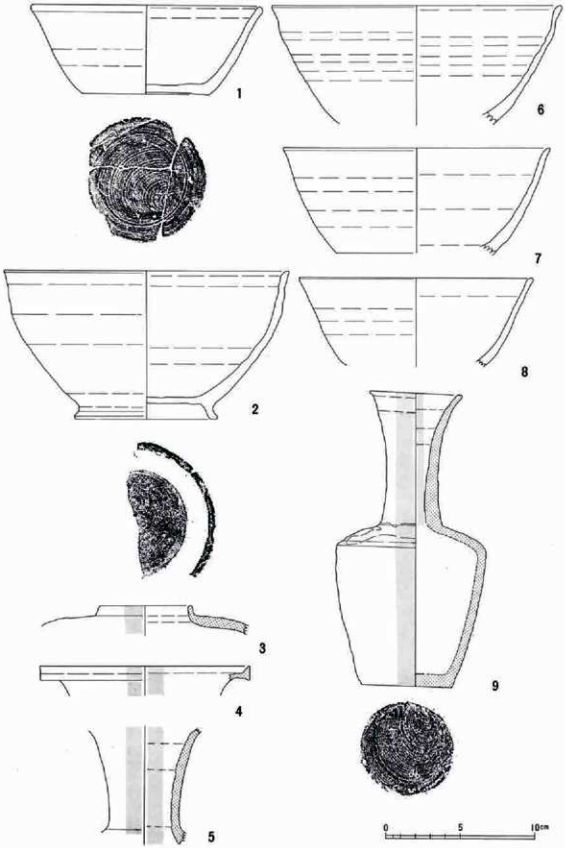
挿図 図版	種別	出土 位置	石質	寸法	重量	備考
37－1 40図版	石槍	7人孔 SS－21	安山岩	長さ12.9 幅 3.7 厚さ 2.1	95g	左側縁を敲打製形。
37－2 40図版	削器	8人孔 黒褐色土	安山岩	長さ11.8 幅 8.9 厚さ 2.4	227g	楕円の薄い横長剥片の下半部の縁辺をそのまま刃部として使用している。
37－3 40図版	削器	8人孔 黒褐色土	頁岩	長さ12.7 幅 6.2 厚さ 1.8	157.5g	右側辺を刃部として使用。
37－4 40図版	削器	8人孔 SD73 B期	玄武岩	長さ 4.4 幅 5.1 厚さ 0.9	18g	下部を刃部として使用。
37－5 40図版	打製石斧	8人孔 黒褐色土	粘板岩	長さ 9.9 幅 7.4 厚さ 2.4	137g	下端から打撃で大きく刃部を剥出したのち両側縁に敲打を集中し整形している。片刃の直刃で技法が特徴的であり、形状も撥形であるところから、トランシエとも考えられる。?
37－6 40図版	打製石斧	5人孔 表土	砂岩	長さ 9.4 幅 7.6 厚さ 2.3	216g	斧頭部に若干の両縁に徹底した敲打整形による流水がみられる。最大幅を刃部付近に持つ撥形である。
37－7 40図版	打製石斧	8人孔 SS－13	砂岩	長さ10.7 幅 8.1 厚さ 2.8	193g	両側縁に敲打を集中し着柄を直図したと思われる溝入が窺える。刃部は使用の結果、大きく剥落、欠損している。又純器である。器体表面中央に着柄の結果ズレが生じ磨滅している。全体によく磨滅し顕著でないが指紋沢がある。最大幅を刃部付近に持つ撥形である。
37－8 40図版	凡字形 石器	8人孔 黒褐色土	砂岩	長さ 8.2 幅 6.7 厚さ 3.6	254g	偏平長楕円の礫を素材として下端を半截して得た底面の縁辺を調整している。周縁部に敲打を集中し側辺は「ハ」の字状に開く。
38－1 41図版	スタンプ状石器	8人孔 黒褐色土	砂岩	長さ 8.9 幅 4.9 厚さ 3.8	210g	甲高断面三角の石器である。断面は右側方向からの力で割れたかのようである。頂部は頂部端方向から数次の打撃で、鈍くはあるが刃のように複数の小剥離を作出している。
38－2 41図版	石皿	8人孔 黒褐色土	花崗岩	厚さ 2.9	208g	磨耗部分が平坦である。
38－3 41図版	凹石	7人孔 SD73 フク土	花崗岩	長さ12.7 幅 7.9 厚さ 4.5	700g	楕円形を呈し、両面に凹が2個ある。側辺部分一部磨滅している。
38－4 41図版	磨凹石	8人孔 黒褐色土	砂岩	長さ 9.0 幅 7.2 厚さ 3.5	272g	不整円形を呈す。凹は浅くて広い。側辺に剥離痕がある。



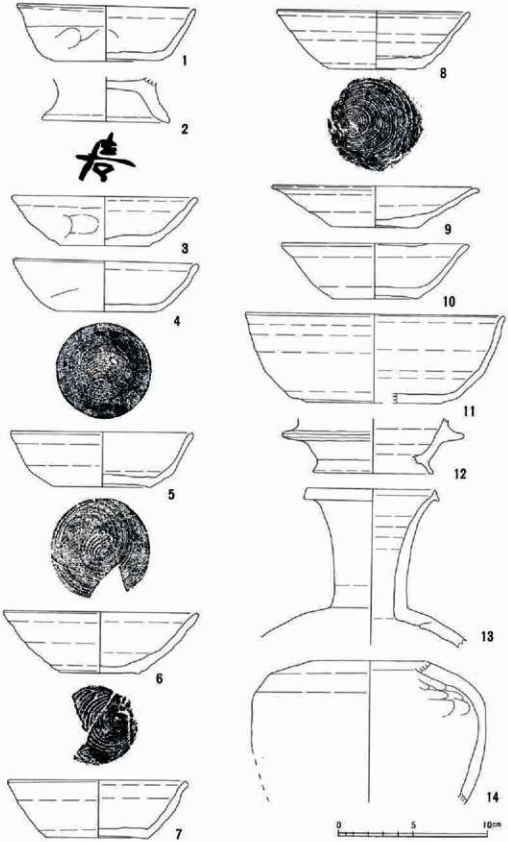
第７図　４・６人孔表土出土遺物



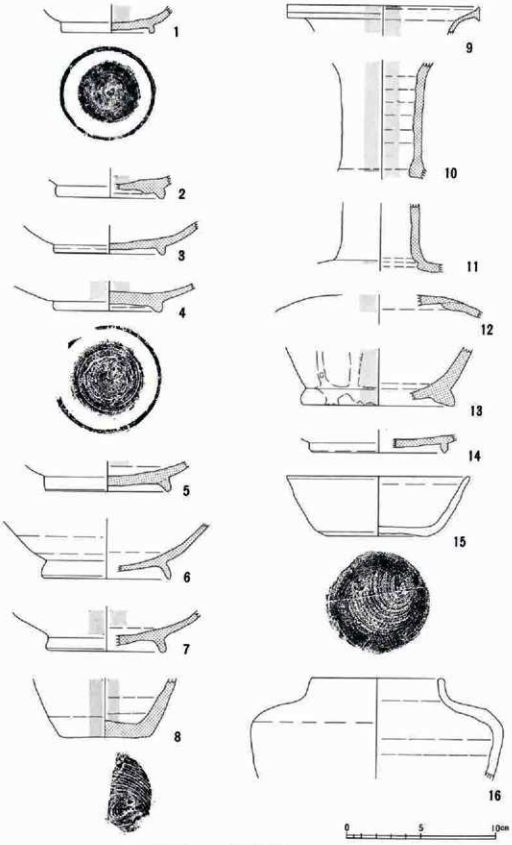
第８図　７人孔ＳＤ73出土遺物



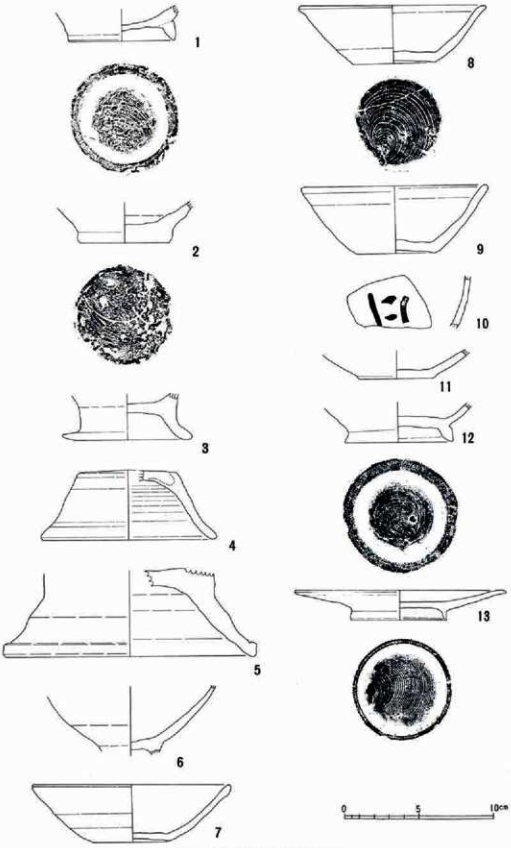
第９図　７人孔ＳＤ73出土遺物



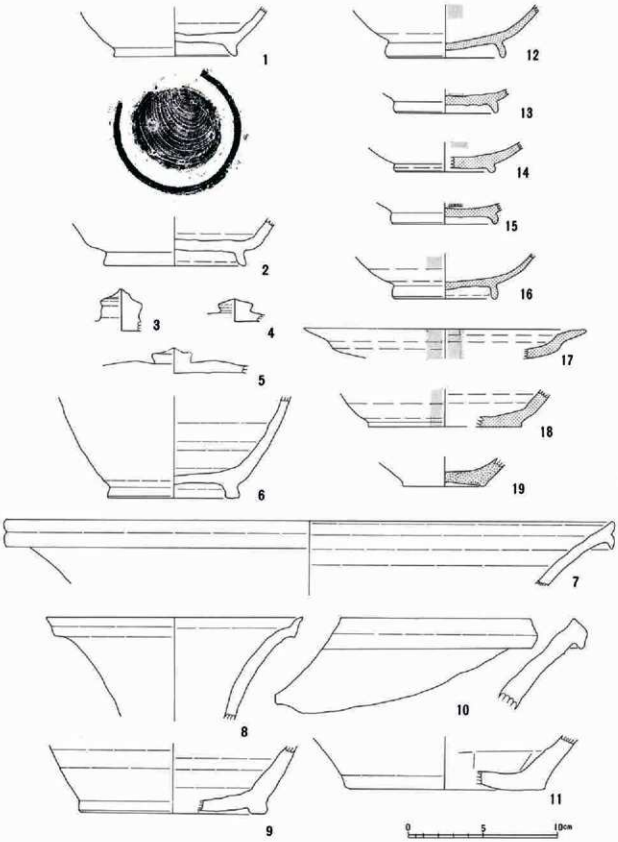
第10図　7人孔表土出土遺物



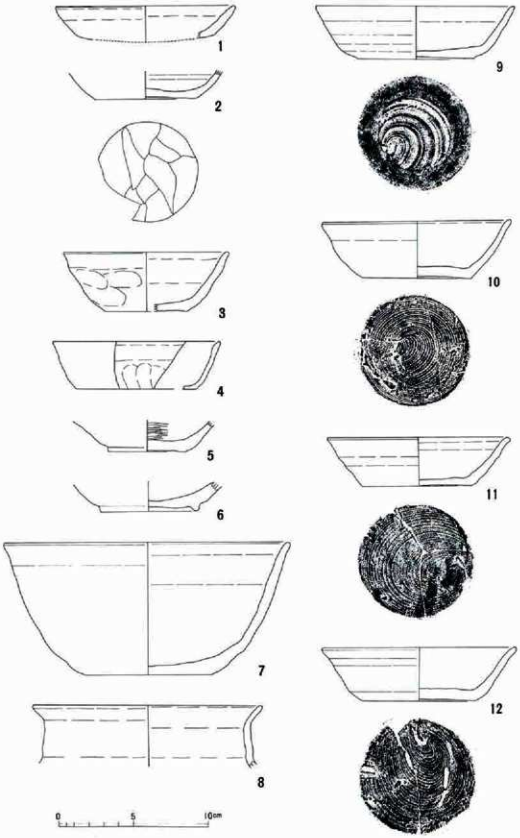
第11図　7人孔出土遺物
表土・1～14、黒褐色土・15・16



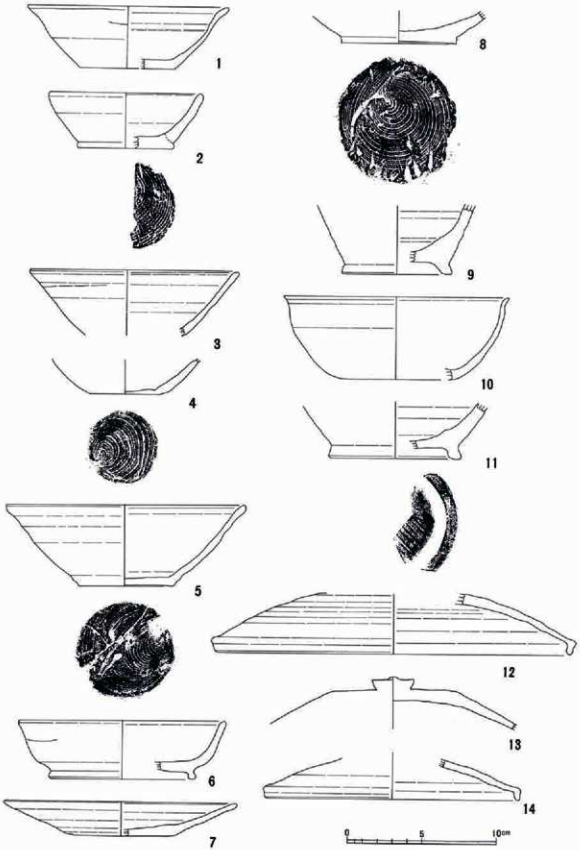
第12図　8人孔SD73A期出土遺物



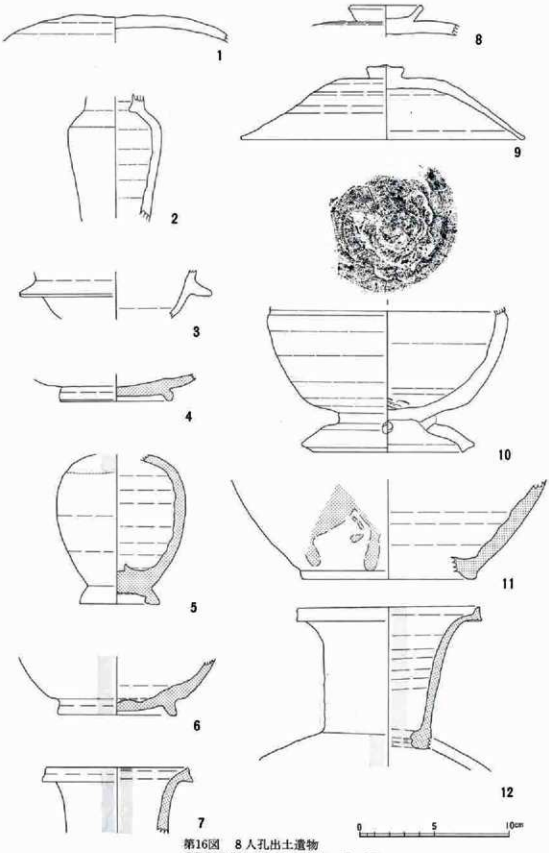
第13図　8人孔SD73A期出土遺物



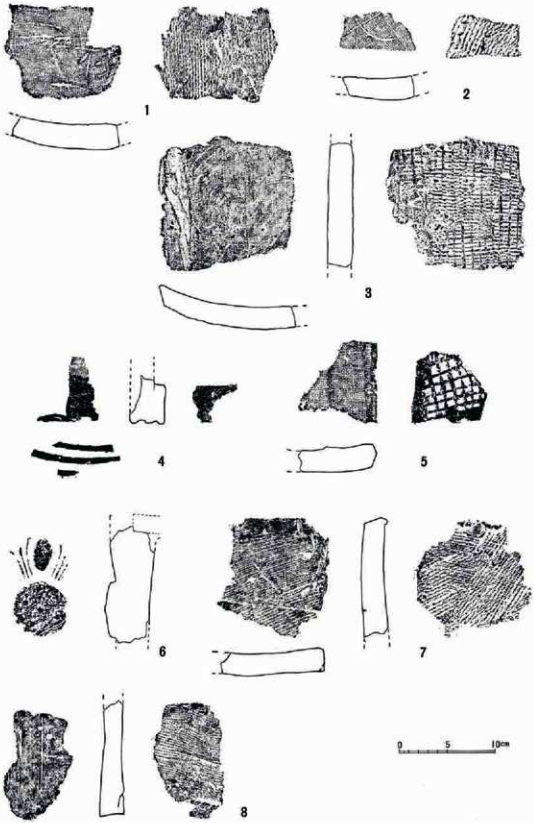
第14図　8人孔SD73B期出土遺物



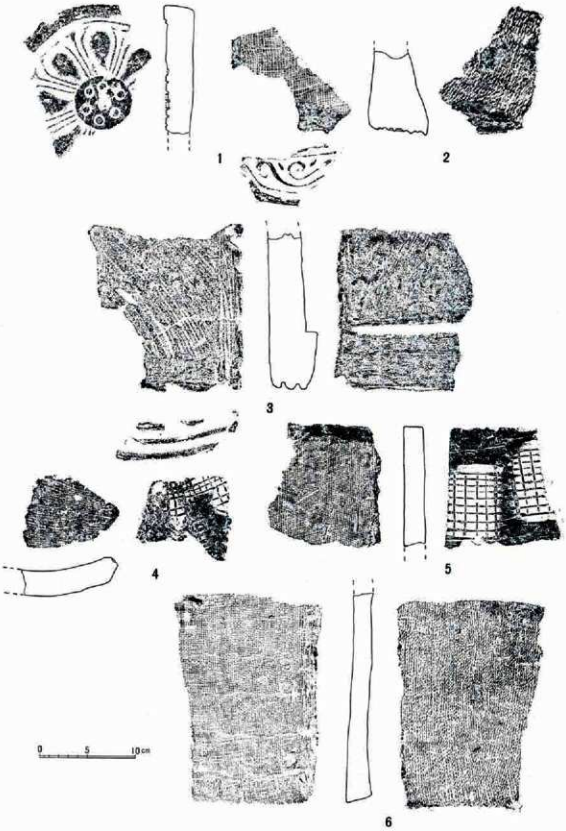
第15図　8人孔SD73B期出土遺物



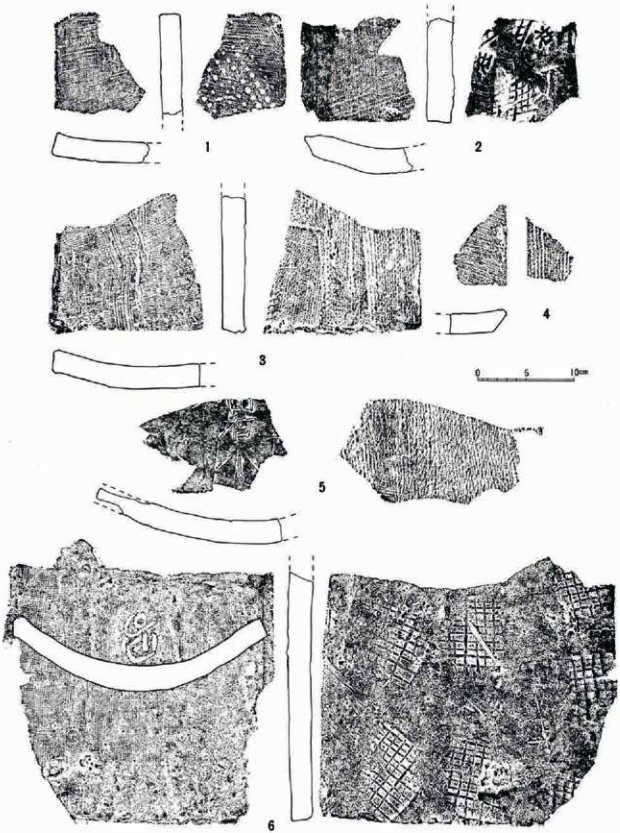
第16図　8人孔出土遺物
SD73B期・1～7、表土・8～12



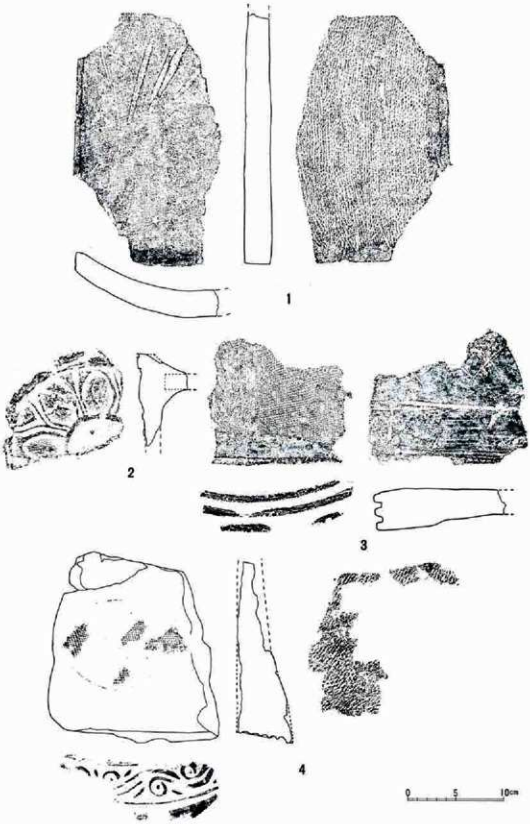
第17図　1・2・3人孔表土出土遺物



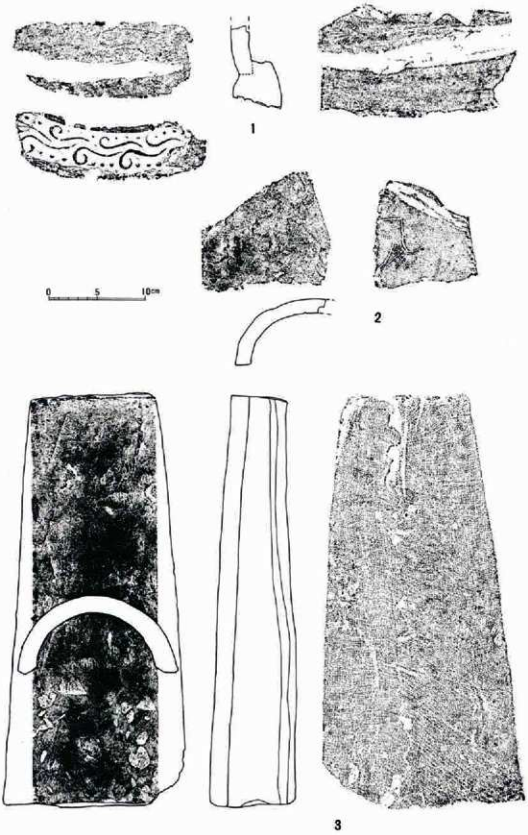
第18図　4人孔表土出土遺物



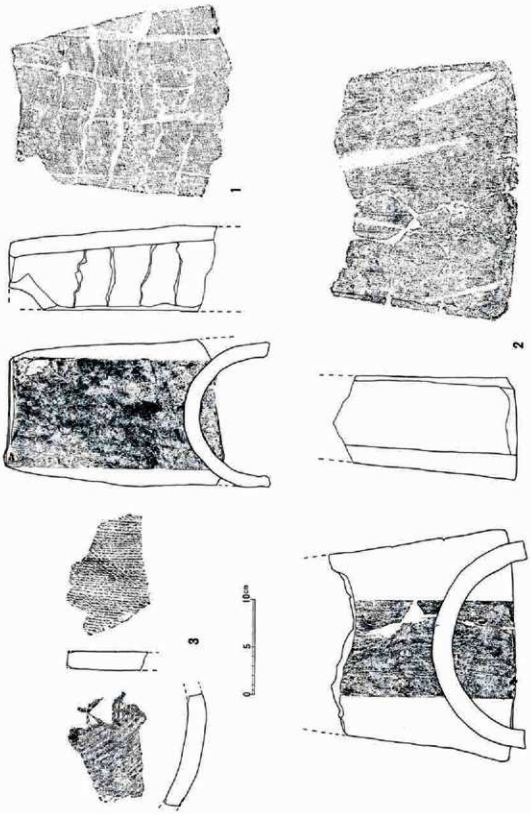
第19図　5人孔出土遺物
表土・2・6、黒褐色土・1・3・4、暗茶褐色土・5



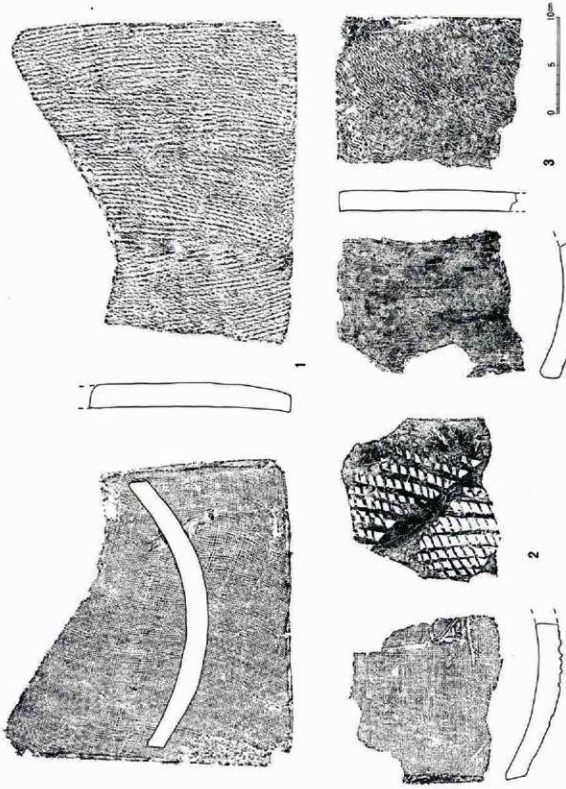
第20図 5・6人孔出土遺物
表土・1・2・3、暗茶褐色土・4



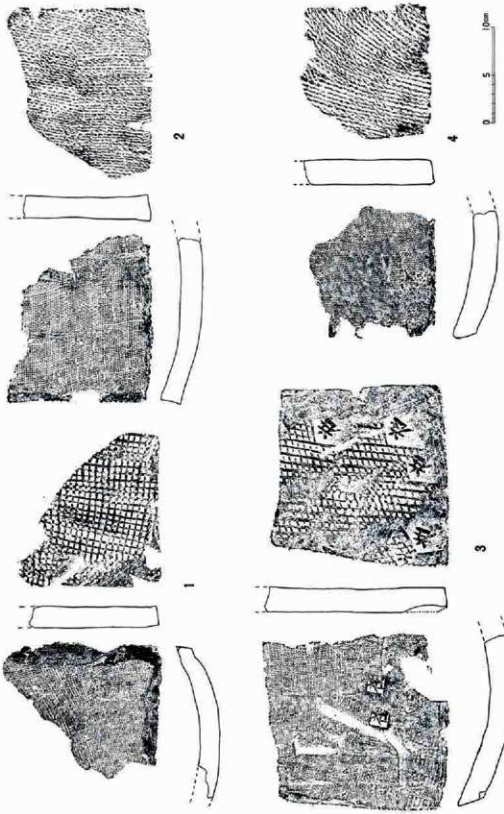
第21図　6人孔出土遺物
表土・2・3、暗茶褐色土・1



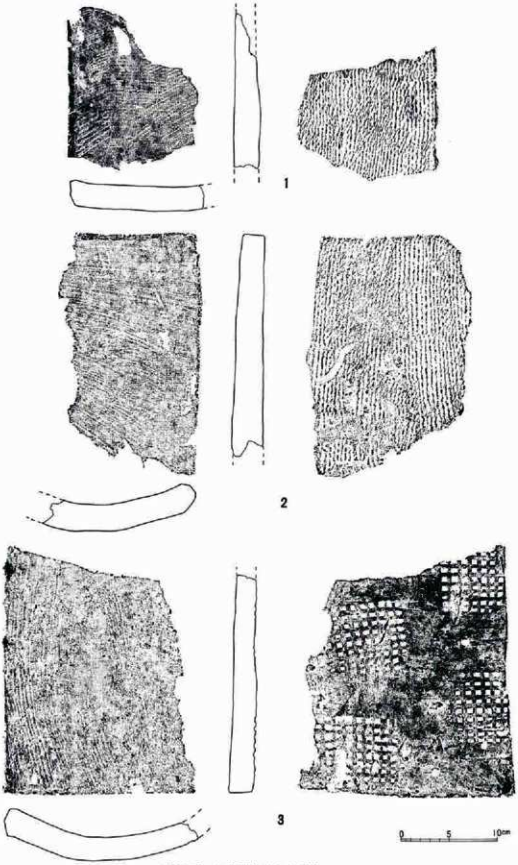
第22図 6人孔表土出土遺物



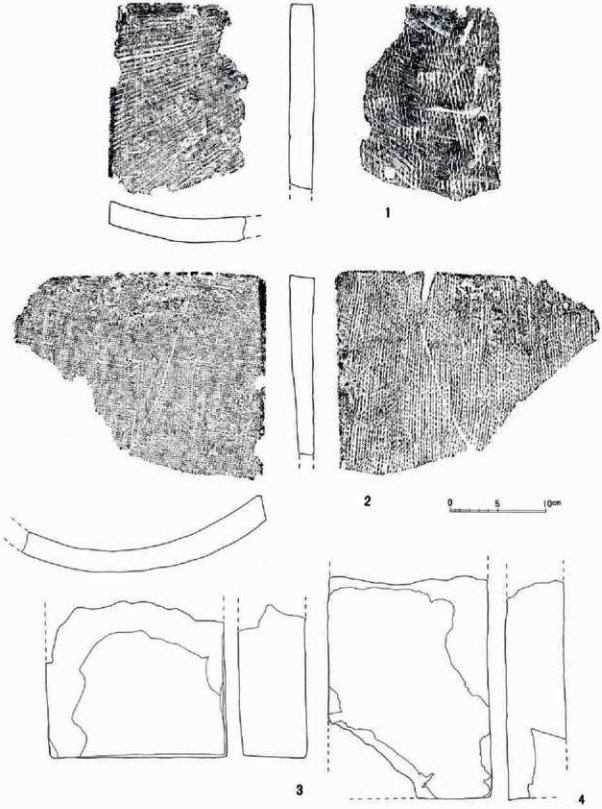
第23図 6人孔表土出土遺物



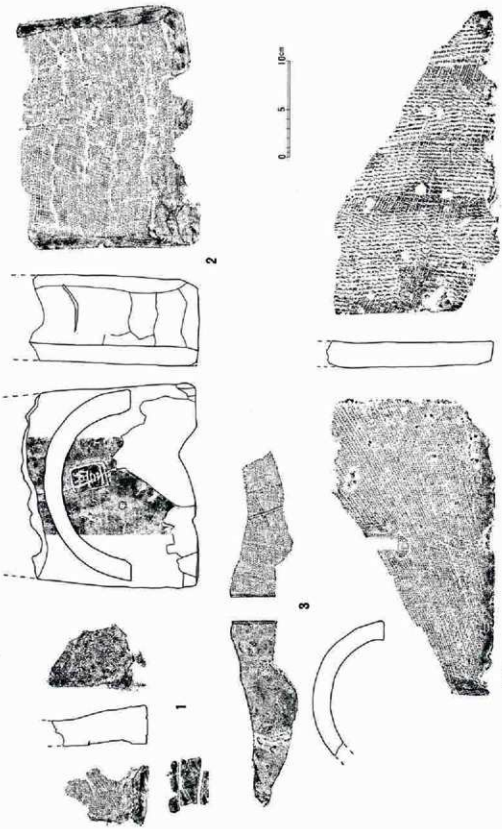
第24図 6人孔表土出土遺物



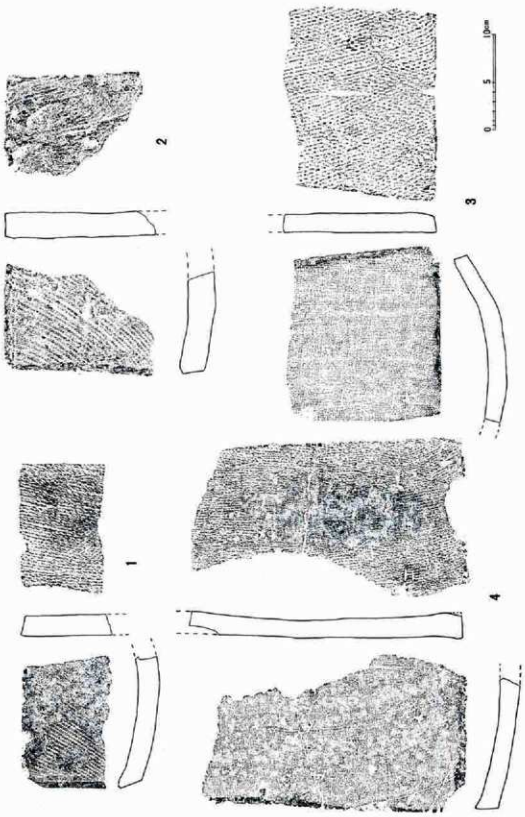
第25図　6人孔表土出土遺物



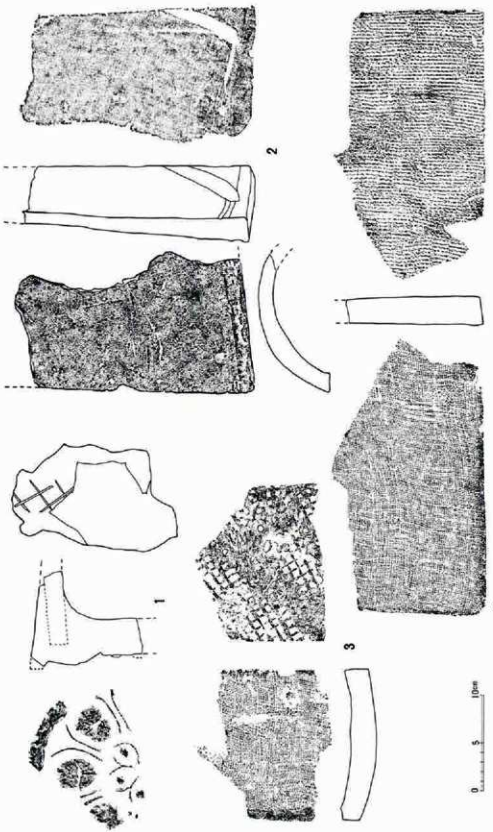
第26図　6人孔表土出土遺物



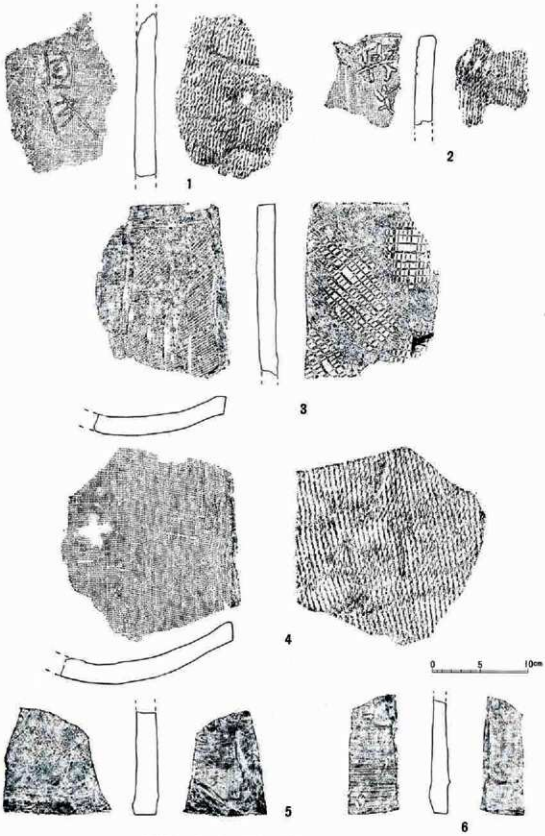
第27図 7人子SD73出土遺物



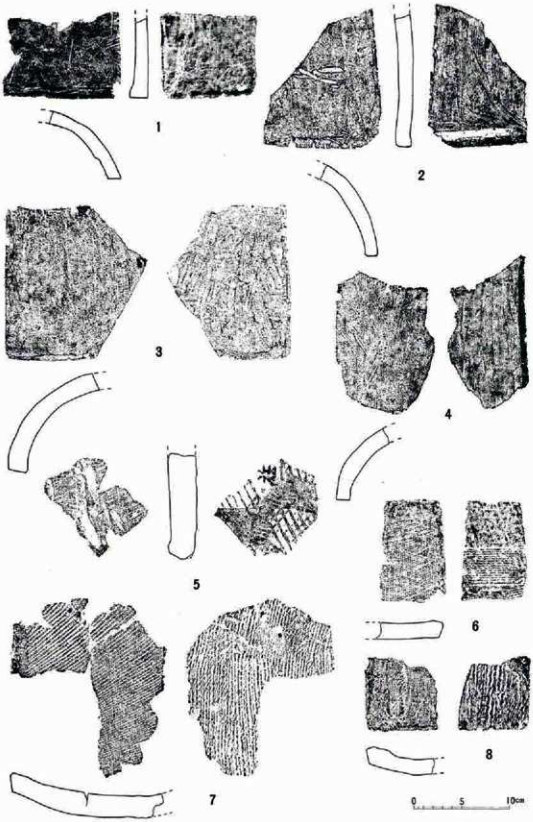
第28図　7人孔SD73出土遺物



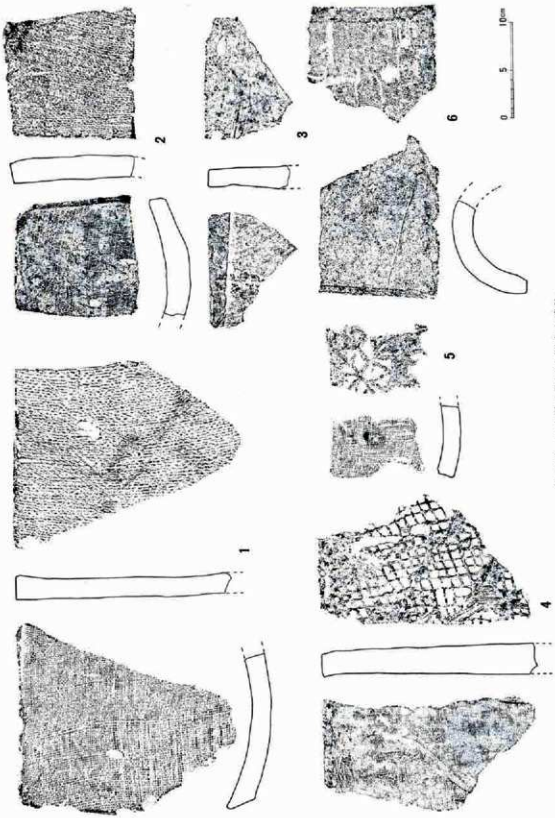
第29図 7人孔表土出土遺物



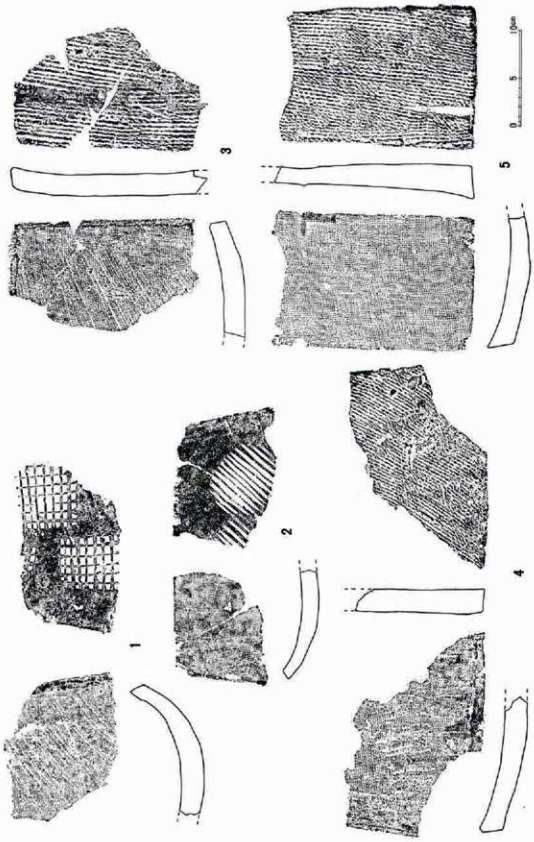
第30図 7・8人孔出土遺物
表土・1・2・3・4、SD73A期・5・6



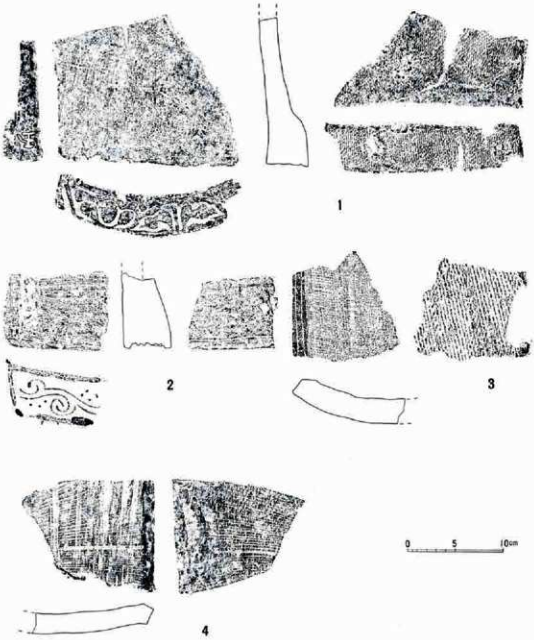
第31図　8人孔SD73A期出土遺物



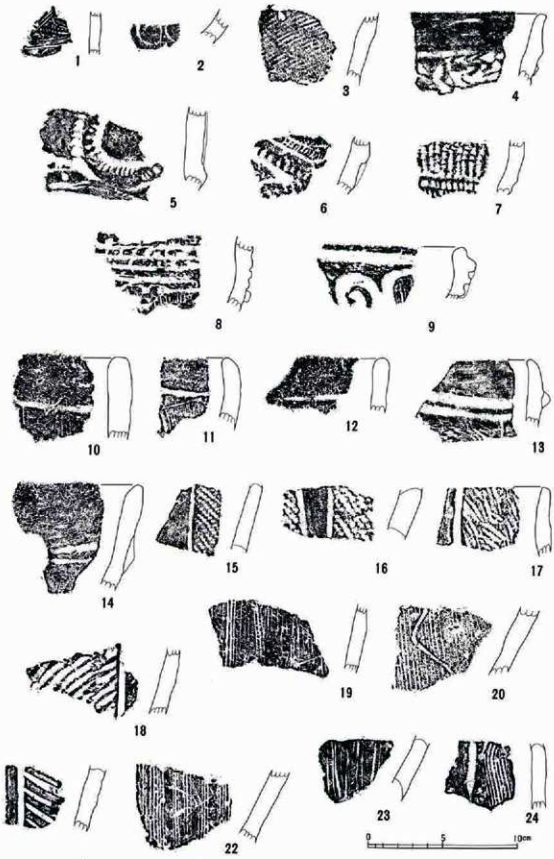
第32図 8人孔SD73A周出土遺物



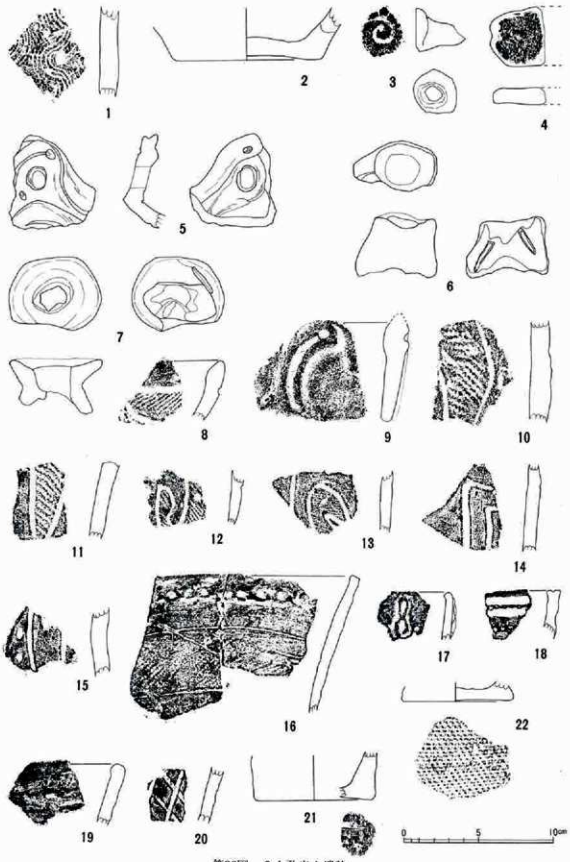
第33図　8入孔SD73B期出土遺物



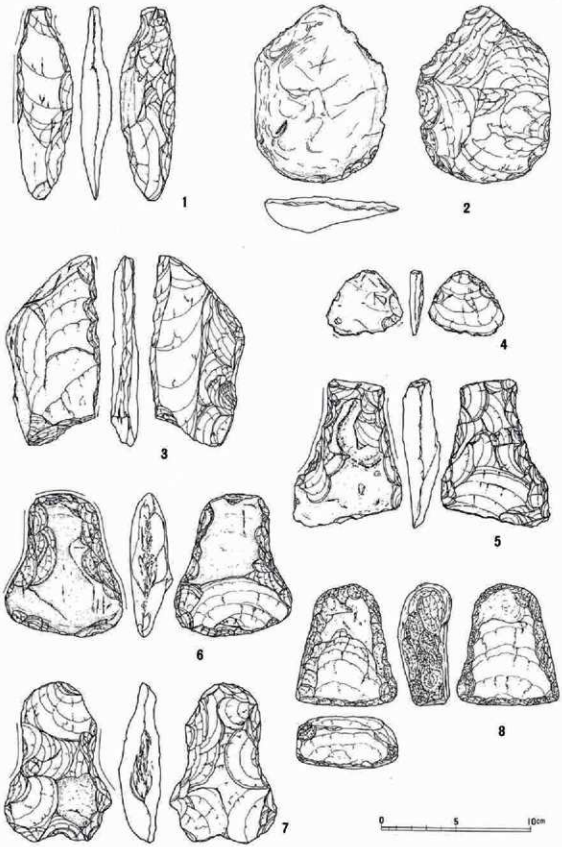
第34図 8・9入孔出土遺物
表土・1・2・3、SK286・4



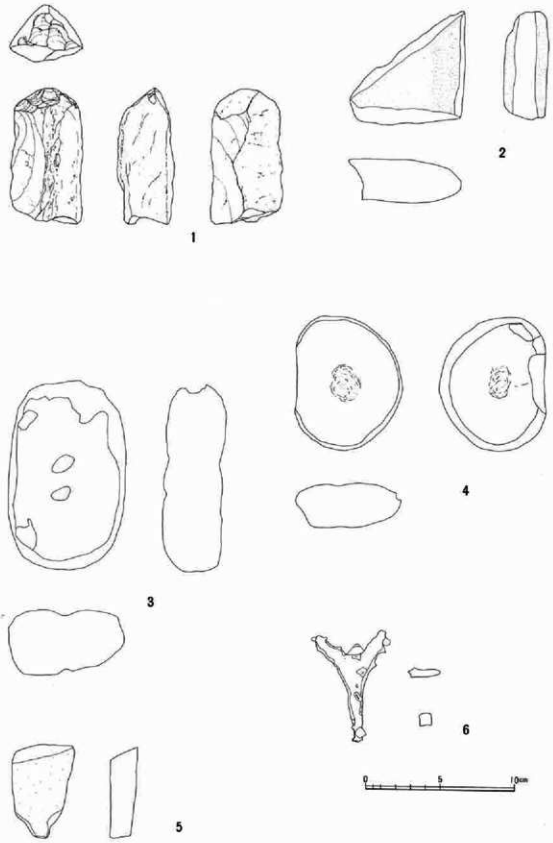
第35図　5・8人孔出土遺物



第36図　8 人孔出土遺物



第37図　5・7・8人孔出土遺物
SS－21・1、SS－13・7



第38図 7・8人孔出土遺物

Ⅶ 小　　結

1．奈良・平安時代検出遺構について

今回の調査で検出された、奈良・平安時代の遺構の中でNo.4 人孔にて検出された硬質面と、No.7・8 人孔にて検出されたSD73溝跡について若干の考察を加えたい。

硬質面について

No.4 人孔において僧寺々域SD23溝跡のフク土上面にて検出される硬質面と同質なものが検出される。SD23溝跡上端面から検出される硬質面は、深さが平均して25cm前後で、溝内の堆積土がレンズ状から水平堆積になった時点で認られる。また、硬質面を境に上方では、遺物が多量に出土することが確認される。(1) No.4 人孔の硬質面は、当初住居跡床面ではないかと考えられていたが、調査区断面の観察により、壁や周溝が認められないこと、硬質面の下に構築時の掘込み等が検出できないことなどから、住居跡とは認められず、単に平面的に広がりを示すだけでその性格は不明である。

SD73溝跡について

No.7 人孔において1条、No.8 人孔においてA期、B期の2条が認められた。両者は僧寺中軸線より北へ78mに位置し同一の東西溝であると考えられる。

溝の堆積土は、砂礫が多量に含まれていることが共通した特徴で、遺物も瓦片、土器等が多量に混入している。また、No.8 人孔B期溝跡底面から約20～40cmの間隔をもって、水に混った鉄分が浸透した褐鉄鉱のラインが付随していることが断面にて観察されることにより、僧寺々域SD23溝のような素掘で、底面にロームブロックを主体となる土により下底面を整地され開口している(2)のではなく、水路として、水が流れた可能性があると考えられる。

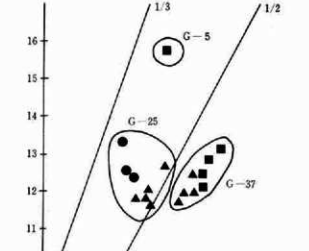
溝底面の高低差を比較してみると、7人孔溝底面の標高より8人孔A・B期溝の方が40～70cm高いことが計測される。従って、SD73溝跡に水が流れたと考えるなら、西から東方向にむかって流路をとり、6人孔、5人孔の断面観察で若干砂礫層が確認されていること。僧寺々域内については、第13次調査四中配水管埋設工事立会の際、または今回の調査で4人孔、3人孔等には溝のフク土である砂礫層が検出されてないことにより、僧寺々域西辺SD23溝跡より東側に伸びている可能性は薄い。

調査区の概観でも述べたように、国分寺崖線直下には現在でも数ヶ所湧水が認られる。これ

らの湧水は一つの流れとなって、東元町２丁目付近で野川本流に合流する。また、僧寺西側地域には湧水を集めた野川支流によって形成され黒鐘谷と呼ばれる浅い開折谷が存在し、谷底低地は立川段丘よりも１～２ｍ低位に位置し、従来は沼か低地として考えられていたが、当調査地付近は、第28次調査で検出されたＳＢ39掘立柱建物跡や、瓦積み基壇状遺構の存在があきらかになり(3)、この低地にこれらの遺構が築かれるにあたり、また、僧寺々域内の整備をおこなうために、崖線下湧水地域には、ＳＤ73溝跡のような湧水や雨水を流した配水路的機能を持つ遺構が必要であったと考えられる。

ＳＤ73溝跡の出土遺物について

各人孔より出土した遺物の量は膨大であるが、表土層より出土したものが大部分で、遺構に伴なった資料は№７人孔、８人孔ＳＤ73溝跡に廃棄されたと考えられる遺物のみである。ＳＤ73出土遺物の中で須恵器坏Ａ（還元焔焼成）のものについて、南多摩窯跡群須恵器坏および北武蔵の窯跡群須恵器と対比を試み、法量、技法などから分類した。先に当調査会、武蔵国府と共に、武蔵国分寺出土土器の変遷を試案として見解を発表し（滝口宏 1980）、また、市立第四中学校建設に伴う調査報告にて、須恵器坏の分類を行っている（西脇俊郎 1980）。その成果をふまえて、ＳＤ73溝跡の時期について考えたい。その補助として他の器種、灰釉陶器の共伴関係を明記したい。



表－２　ＳＤ73溝跡出土須恵器坏(A)、口径・底径対比図表

№７人孔　ＳＤ73溝跡

須恵器坏底部整形技法は、回転糸切りのみで再調整されたものはない。底径、口径の法量は底径×２＞口径のもの（第８図、２、６、７、８）、南多摩窯跡群Ｇ－37窯期須恵器坏に対比されると考えられる。次に底径×２＜口径のもの（第８図、３、４、５、９、10）に対比される窯跡は、南多摩窯跡群Ｇ－25窯期と考えられる。

№８人孔　ＳＤ73Ａ期溝跡

須恵器坏底部整形技法は、回転糸切りのみで再調整されたものはない。底径、口径の法量は底径×２＜口径のもの（第12図、７、８、９）である。南

多摩窯跡群Ｇ－25窯期須恵器坏に対比されると考えられる。

№８人孔　ＳＤ73Ｂ期溝跡

須恵器坏底部整形技法は、回転糸切り後、外縁部回転ヘラ削りが施されたもの（第14図、9）、回転糸切りのみで再調整されてないもの（第14図、10、11、12）である。これらの法量は№７人孔ＳＤ73溝跡出土須恵器坏の法量に比較して、底径×２＞口径の差が大きくなる法量を持ち、北武蔵の八坂前４号窯期須恵器坏（底部回転糸切りが主体をしめるが、一部外周のヘラ削り調整が残る）、南武蔵における南多摩窯跡群Ｇ－37窯期須恵器坏に対比されると考えられる。次に底径×２＜口径のもの（第15図、２）対比される窯跡は、南多摩窯跡群Ｇ－５窯期と考えられる(4)。（表２参照）

灰釉陶器の共伴関係をみてみると、№７人孔ＳＤ73溝跡より、折戸53号窯期と平行する、東濃系大原－２号窯期のもの（第９図、５）、産地不明のもの（第９図、３、４、９）が伴出している。№８人孔ＳＤ73Ａ期溝跡において、黒笹14号窯期と平行の尾北窯篠岡－47号窯期のもの（第13図、７）、黒笹90号窯期（第13図、８）、黒笹90号窯期と平行の東濃系光ヶ丘－１号窯期のもの（第13図、13）が伴出している。№８人孔ＳＤ73Ｂ期溝跡において、井ヶ谷78窯期もしくは黒笹14号窯期のもの（第16図、５）、折戸53号窯期のもの（第16図、４）、猿投窯と考えられるが、窯は不明のもの（第16図、６、７）が伴出している(5)。

灰釉陶器の編年観は、最近の猿投窯、尾北窯、美濃窯（東濃）等における発掘調査の成果から従来の編年に対して再検討を必要とする問題点が存在することにより(6)、今回は溝の年代を考える上で、須恵器坏を使用し、灰釉陶器は除外した。

次に武蔵国府、国分寺跡出土土器変遷図(7)と南多摩窯跡群の須恵器坏の編年(8)にあてはめ、ＳＤ73溝跡より出土の須恵器坏Ａの時期を対比させると、国分寺跡出土土器変遷図、第Ⅲ期の時期に位置づけられる(9)。第Ⅲ期第１段階では、須恵器坏底部回転糸切り後、外周ヘラ削りするものと、回転糸切りのままのものが伴出し、第Ⅲ期第２段階以降は、須恵器坏は底部回転糸切りのままとなる(10)。また、第Ⅲ期は第４段階まで区分されており、第１段階は南多摩窯跡群Ｇ－37窯期、第２段階はＧ－59窯期、第３段階はＧ－25窯期、第４段階はＧ－５窯期に対比されると考えられる。これらの窯には、Ｇ－37は９世紀前半より９世紀中葉、Ｇ－59は９世紀後半より９世紀末まで、Ｇ－25は10世紀初めより10世紀前半、Ｇ－５は10世紀前半から10世紀後半までの年代が与えられる(11)。

従って須恵器坏の編年観より、ＳＤ73溝跡に年代をあてはめるならば、８人孔Ｂ期溝跡は、９世紀中葉まで、Ａ期溝跡は、９世紀中葉より10世紀前半まで溝の機能を果していたものと考えられる。また７人孔ＳＤ73溝跡についても、攪乱により遺構の区分ができなかったが、ほぼ同時期に存在したものと推測される。

註1　滝口宏他　1980　「特集武蔵国府と国分寺」　文化財保護第12号

2　註1と同じ

3　註1と同じ

4　SD73B期出土遺物、須恵器坏は、G－37窯期のものが主体をしめている。また、A期・B期溝跡の間に約5cmの間層が確認されているが、A期フク土の遺物がB期フク土にまぎれこむ可能性は十分に考えられることにより、G－5窯期と考えられる坏は溝の時期を考察する上で除外した。

5　灰釉陶器の窯跡との対比は斉藤孝正・守屋雅史氏の御教示を得た。

6　椙崎彰一・斉藤孝正　1981　「猿投窯編年の再検討について」シンポジウム『平安時代の土器』発表要旨

7　註1と同じ

8　服部敬史・福田健司　1981　「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』　第12号

9　第Ⅲ期の時期については、註1で発表したものと一部異なるために、修正しておきたい。

10　対比される窯跡については、註1で発表したものに追加してある。修正しておきたい。

11　服部敬史　1982　「東京考古」　南武蔵における古代末期の土器様相、編年表（A案）使用

2．縄文時代検出遺構について

今回の調査では、2基の集石が検出され、その概要は、Ⅴ検出遺構で述べたとおりである。2基の集石の規模、集石を構成する礫の様相は異なるが、集石は平面的に広がりをしめすこと、底面に土坑状の掘込みが検出されないことに共通点が認められる。8人孔SS－13には、一部焼礫が含まれている。また8人孔Ⅱ層黒褐色土中より、縄文中期後半より後期前半を主体とする土器片が出土していることよりほぼこの時期の遺構と推察される。遺構が検出された7人孔、8人孔は、Ⅰ調査地区の概観で述べた「黒鐘谷」地域にあたり、すくなからず Ⅲ層暗茶褐色土上面ないしは中位に、縄文時代の遺構が確実に存在することが確認された。

これら個別遺構の意味については、今回の調査では明らかにし得ないが、その存在の意味は看過できないものがある。すなわち、国分寺崖線上（武蔵野段丘）に展開する集落遺跡との関係を示唆し、さらには、崖線下の湧水地および黒鐘谷に面する立川段丘上における該期の遺跡が存在することが、前原遺跡、貫井南遺跡を例として窺えるのである。

参 考 文 献

ア．浅野晴樹　1980　「埼玉県出土の平安末期の施釉陶器」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第２号

サ．坂詰秀一・小林昭彦　1981　「武蔵・八坂前窯跡」　第Ⅱ次調査概報

佐原　真　1972　「平瓦桶巻きづくり」　考古学雑誌　第58巻第２号

ス．鈴木隆介・片山恒雄　1974　「震災対策基礎調査報告書（地形・地質・地盤編）」　国分寺市都市整備部公害防災課

ジ．J・E　kidder　1976　「前原遺跡」　前原遺跡調査会

タ．滝口宏他　1977　『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅲ』　武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会

〃　1979　『武蔵国分寺遺跡調査会年報1974　武蔵国分寺跡』　武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会

〃　1980　「武蔵国府と国分寺」『文化財の保護』　第12号

〃　1980　『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅳ』　鉄道学園幹線実習館建設に伴う調査　武蔵国分寺遺跡調査会

〃　1981　『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅴ』　市立第四中学校建設に伴う第１次調査　武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺教育委員会

〃　1979　「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅷ」　多摩ニュータウン遺跡調査会

ナ．永峯光一他　1974　「貫井南」　小金井市貫井南遺跡調査会

ハ．服部敬史・福田健司　1979　「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第６号

〃　〃　1981　「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号

服部敬史　1981　『南多摩窯址群－御殿山地62号窯址発掘調査報告書』　八王子バイパス鑓水遺跡調査会

〃　1982　「東京都八王子市大法寺裏遺跡の調査」『神奈川考古』　第13号

〃　1982　「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古Ⅰ』

フ．福田健司　1978　「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻第３号

図　　版

第1図版　調査地区

1.調査地点遠景(南より)

2.調査地点遠景(東より)

3.調査風景

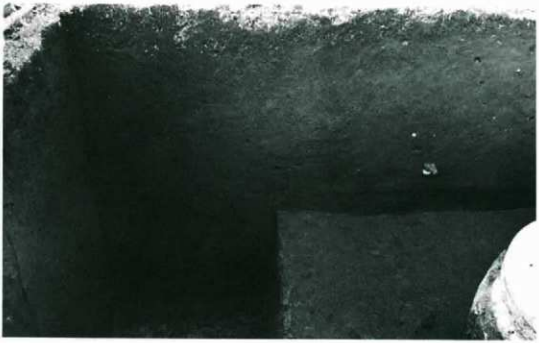
第2図版　1・2人孔

1．1人孔調査区全景
(北より)

2．2人孔調査区全景
(東より)

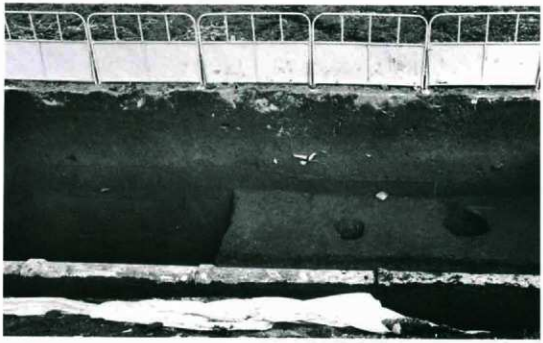
3．2人孔調査区西壁断面

第3図版　3・4人孔



1．3人孔調査区北壁断面

2．4人孔調査区全景
（西より）

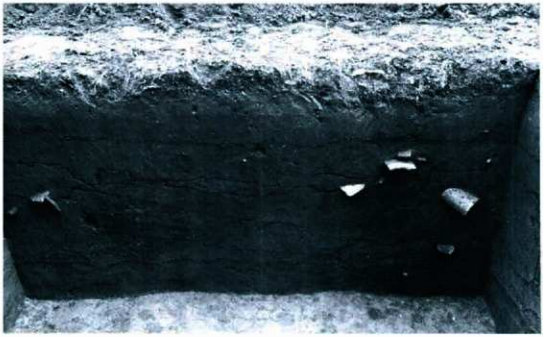


3．4人孔調査区北壁断面

第4図版　5・6人孔

1．5人孔調査区全景
（東より）

2．6人孔調査区全景
（東より）



3．6人孔調査区南壁断面

第5図版　7人孔

1．7人孔調査区全景
（東より）

2．7人孔調査区西壁断面

3．7人孔SD73溝跡全景（東より）

第6図版　7人孔

1．7人孔焼土堆積状態
（東より）

2．7人孔SS21集石出土
状態（南より）

3．7人孔SS21集石出土
状態（西より）

第7図版　8人孔

1. 8人孔SD73A期溝跡
全景(東より)

2. 8人孔SD73B期溝跡
全景(東より)

3. 8人孔SD73A・B期
溝跡断面

1．8人孔SS13集石出土状態(西南より)

2．9人孔SK286土坑全景(東より)

3．9人孔SK286土坑断面

第9図版　4・6・7人孔出土遺物

7－1

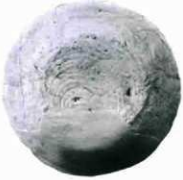
7－9

7－4

7－8

7－6

8－1



8－2

7－7

8－3

第10図版　7人孔出土遺物

8－4

8－8

8－11

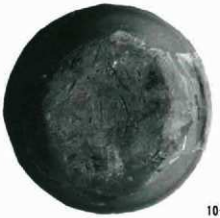
8－13

9－1

9－9

9－2

第11図版　7人孔出土遺物



10－1

10－2

10－4

10－5

10－7

10－14

第12図版　7・8人孔出土遺物

10－8

10－13

11－1

12－3

12－4

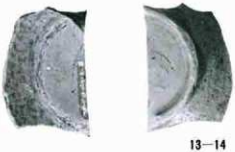
12－7

12－8

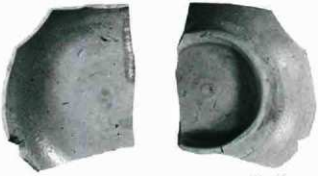
12－13

第13図版　8人孔出土遺物

13—13



13—14



13—16

13—18

13—19

14—7

14—9

14—10

14—11

15—5

第14図版　8人孔出土遺物

15－6

15－7

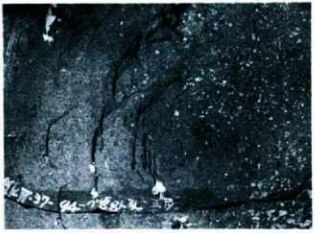
15－11

16－3

16－5

16－8

16－9



16－10

16－12

第15図版　1・2人孔出土遺物

17－1

17－2

17－3

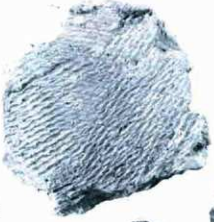
17－4

17－5

第16図版　3・4人孔出土遺物

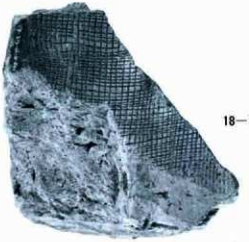
17－6

17－8

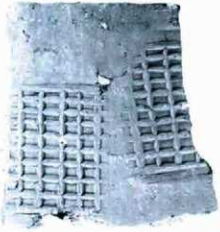


17－7

18－1



18－2

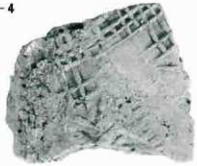


18－5

第17図版　4人孔出土遺物

18－3

18－4



18－6

第18図版　5人孔出土遺物

19－1

19－4

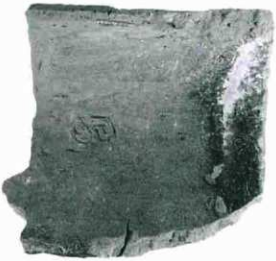
19－2

19－3

第19図版　5人孔出土遺物

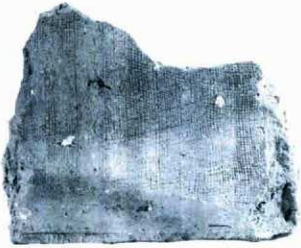
19—5

19—6



20—1

第20図版　6人孔出土遺物



20－3

20－2

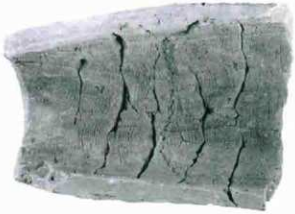
20－4

第21図版　6人孔出土遺物

21—2

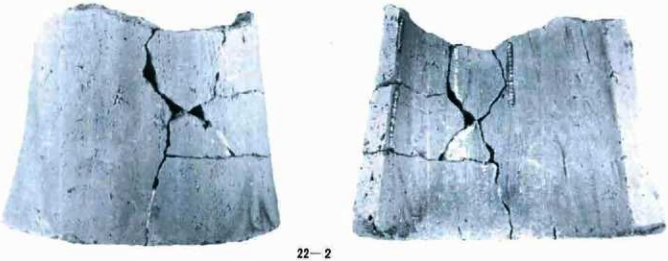
21—3

21—1

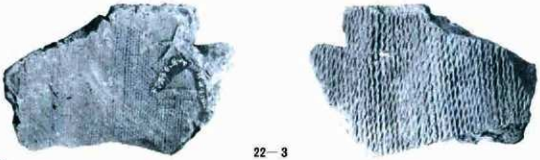


22—1

第22図版　6人孔出土遺物

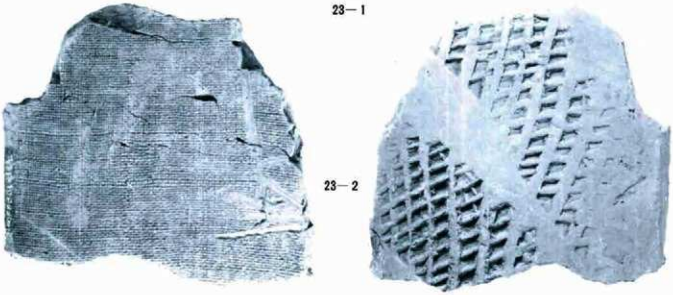


22－2



22－3

23－1



23－2

第23図版　6人孔出土遺物

23－3

24－1

24－2

第24図版　6人孔出土遺物

24—3

24—4

25—1

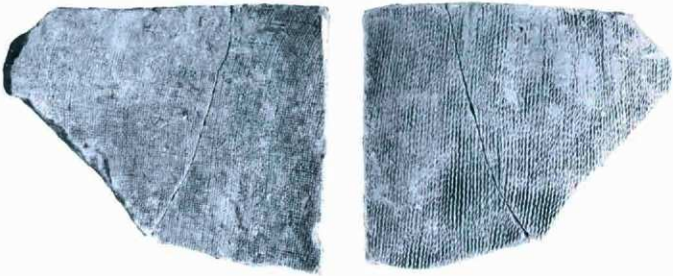
第25図版　6人孔出土遺物

25－2

25－3

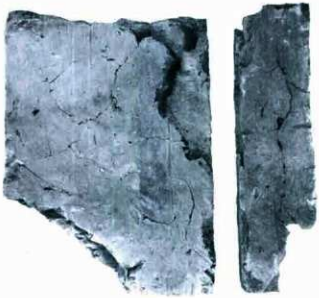
26－1

第26図版　6・7人孔出土遺物

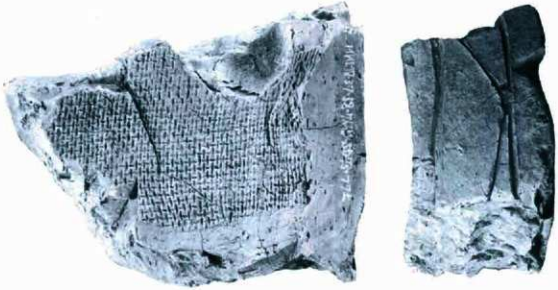


26－2

26－3



26－4



27－1

第27図版　7人孔出土遺物

27—2

27—3

28—1

27—4

第28図版　7人孔出土遺物

28－2

28－3

28－4

第29図版　7人孔出土遺物

29－1

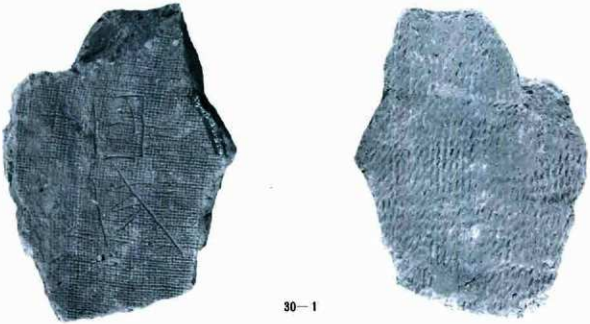
29－2

30－2

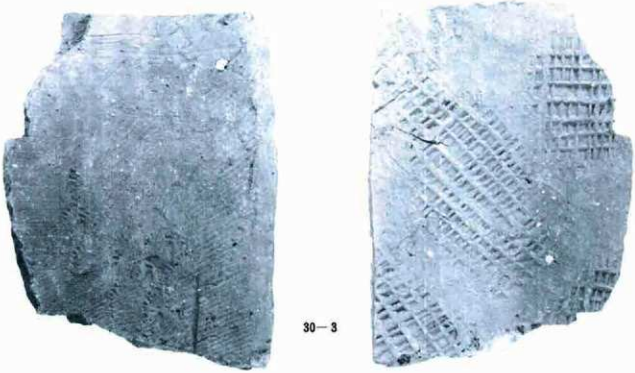
29－3

第30図版　7人孔出土遺物

29－4



30－1



30－3

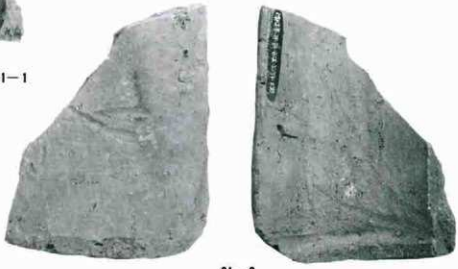
第31図版　7・8人孔出土遺物

30－4

30－5

30－6

31－1



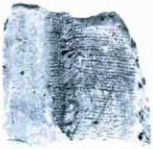
31－2

第32図版　8人孔出土遺物

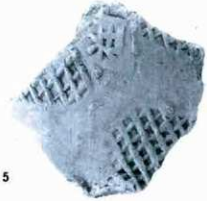
31－3

31－4

31－6

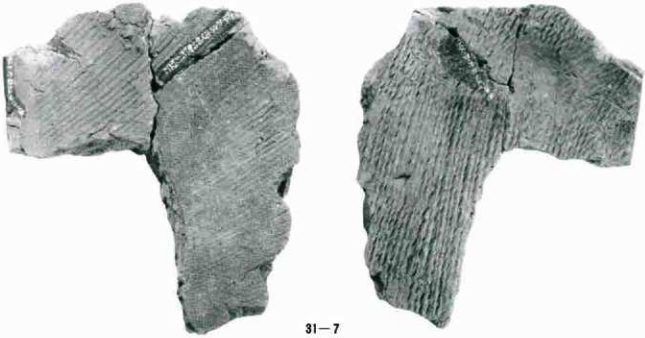


31－8

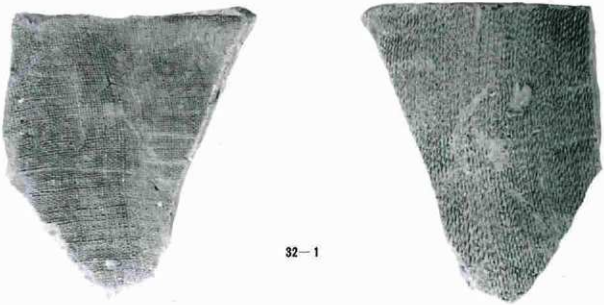


31－5

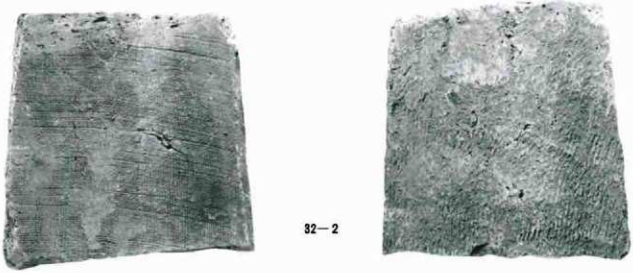
第33図版　8人孔出土遺物



31－7



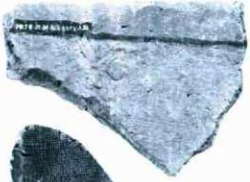
32－1

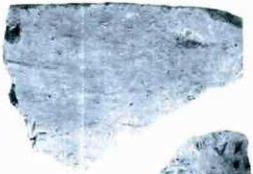


32－2

第34図版　8人孔出土遺物

32－5



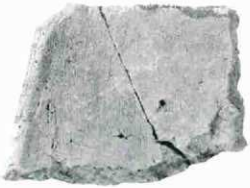


32－3

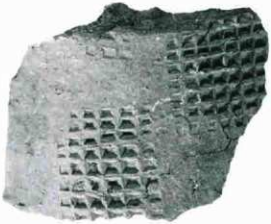
32－4

32－6

第35図版　8人孔出土遺物



33－2



33－1

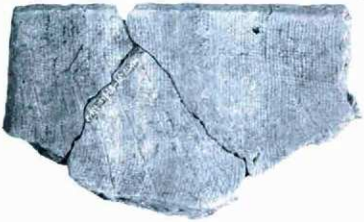
33－3

第36図版　8人孔出土遺物

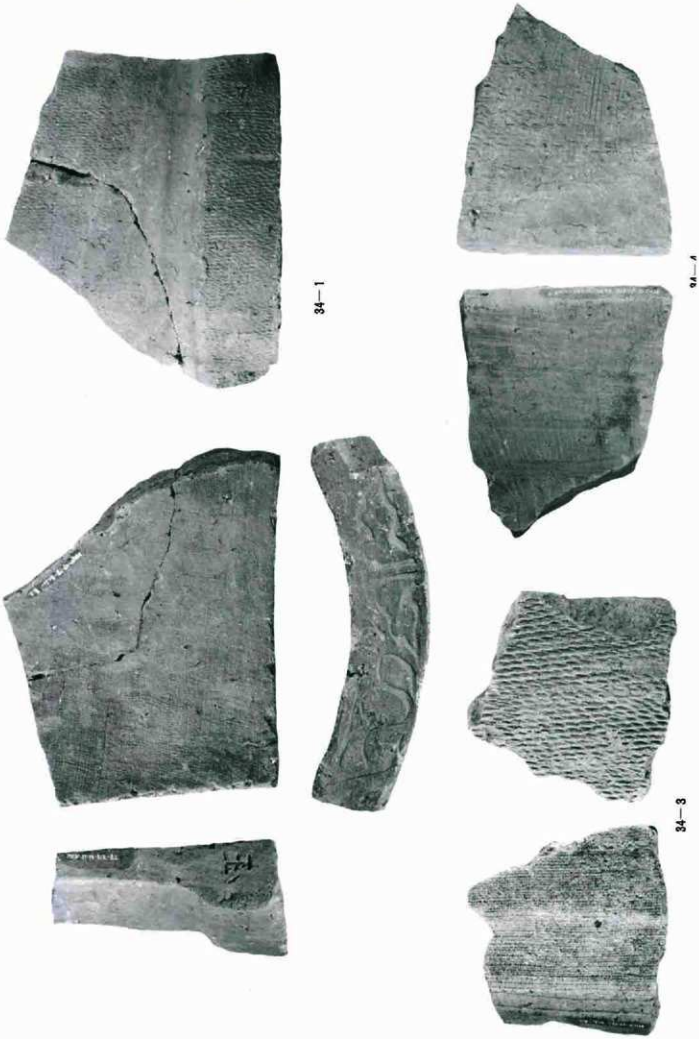
34—2

33—4

33—5



第37図版　8・9人孔出土遺物



第38図版　縄文土器

35－1

35－2

35－3

35－4

35－5

35－6

35－7

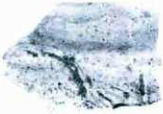
35－8

35－9

35－10

35－11

35－12


35－13

35－14

35－15

35－16

35－17

35－18

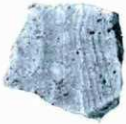
35－19

35－20

35－21

35－22

35－23

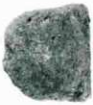

35－24

36－1

第39図版　縄文土器

36—2

36—3


36—4

36—5

36—6

36—7

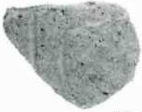
36—8

36—9

36—10

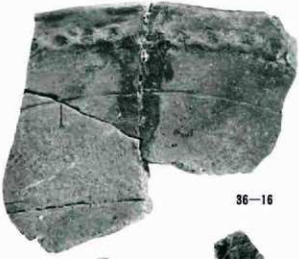
36—11

36—12


36—13

36—1

36—15


36—16

36—17

36—18

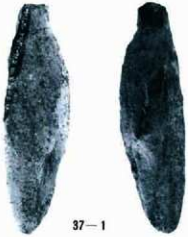
36—19

36—20

36—21

36—22

第40図版　石器



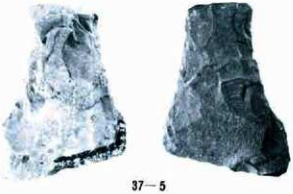
37－1

37－2

37－3

37－4

37－6



37－5

37－7

37－8

第41図版　石器・鉄器

38－1

38－2

38－3

38－4

38－5

38－6

武蔵国分寺遺跡発掘調査概報　Ⅵ
市公共下水道南部地区15号工事に伴う調査

昭和57年３月31日
編　著　武蔵国分寺遺跡調査団

©（団長　滝口　宏）
発　行　武蔵国分寺遺跡調査会
東京都国分寺市教育委員会
印　刷　第一法規出版株式会社

令和４年（2022）３月９日　デジタル版作成